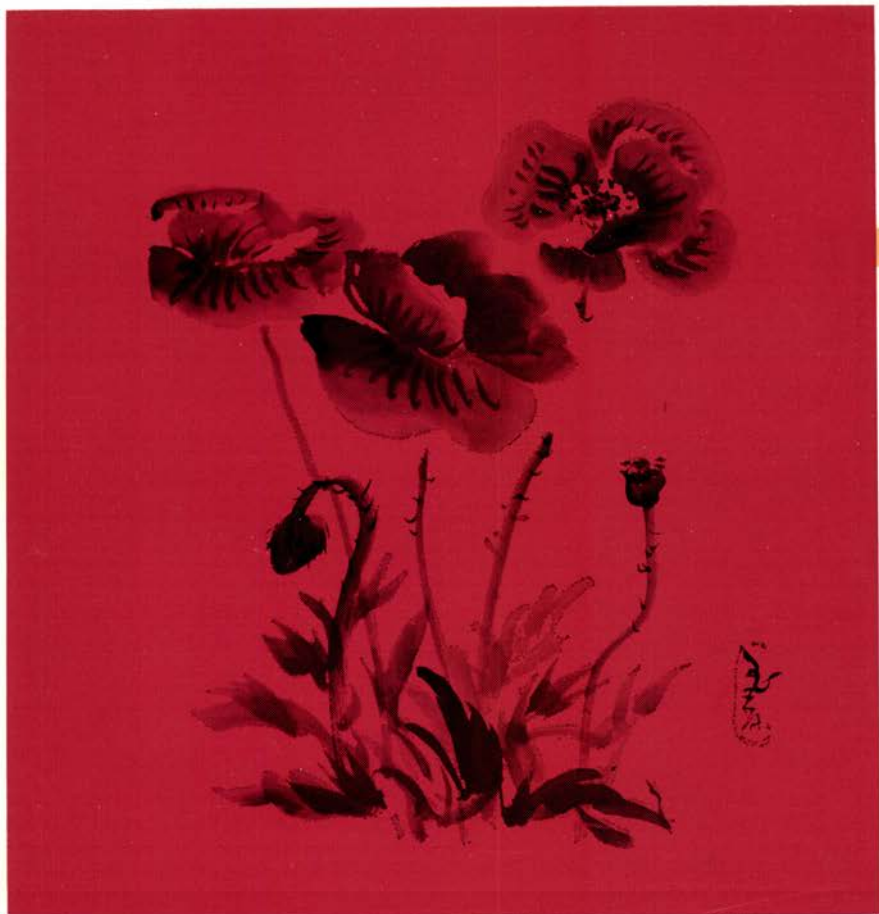


川柳塔

昭和四十一年一月二十九日 第三種郵便物認可
昭和四十九年三月二十五日 印刷
昭和四十九年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五六三号



No. 563

特集・句の旅・花の旅

四月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入)
ハリウッド語・一、八〇〇円

酒 清
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 釀



国立公園 奥新和歌浦
・雑賀崎



国際観光旅館

うかまた
魚又楼

風光明媚な
海岸美を
誇る

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

天 才

三月ともなると森羅万象、わけでも作句に
対する私の頭などは全細胞が弛緩して平素よ
り一層回転がにぶくなる。ぼんやり天の一角
をにらんでいと電子計算機のキイを押した
だけで、限りもなく句が流れ出る夢、インス
タント天才の幻が浮かんだりする。バイロン
はペンの走る速さで作品をつくったと聞くが
そんなのばかりが天才ではなく、中には春日
遅々の環境で傑作を生み出す天才もあるであ
ろう。ナポレオンは戦争の天才と言われたが
一方彼はど本を読んだ軍人も少くないそう

だ。生来特別の能力を持っているのが天才と
いうのなら、彼は人からすばらしく学びとる
能力を多分に与えられていたという事にな
る。われわれ凡人の場合、たとえ僅かとはい
え与えられた素質があるとすれば、その乏し
い素質を培い育ててゆくしかないだろう。そ
れには周囲から少しでも多く学びとりながら
不断的努力以外に道がある筈はない。初心者
を時々襲うインスタント天才など愚の骨頂で
ある。

言葉すくなく茶巾に映える喜寿の艶

K宗匠喜寿

庭下駄になまめく春の芝が媚び
倅せすぎ何かありそう身をかわし
手ぶらの言いわけ本当の灯がともり
カーテンもとりかえ嫁の荷がとどき

中 島 生 々 庵

川 柳 塔 4 月 号

座右の句

夕桜とんぼがえりがしてみたし

(路 郎)

私の句

水仙の花から冬が解けはじめ

宮 口 笛 生

川柳塔四月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

天

才

中島生々庵

(1)

桜・さくら

若本多久志

(2)

俳風柳多留廿五篇研究

(二)

(22)

清 博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原 亮
鈴木 黄・室山三柳・入江 勇・岡田 甫

半生紀前の節約時代

東野 大八

(24)

川柳塔(同人作品)

中島生々庵選

(4)

水煙抄

川村好郎選

(30)

一分間の柳論

国弘半休門

(41)

舟木与根一

(43)

秀句鑑賞(同人吟)

西尾 栞

(26)

(水煙抄)

橘高薫風

(27)

各地柳壇賞決定

若本多久志

(20)

桜・さくら

若本多久志

花といえば、すぐ桜が頭に浮ぶ。ことほどさように、日本人にとっては「さくら」にまつわる想い出や、強く印象に残っていることが多いようである。

小学校に入って、国語読本第一頁の「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」を習った頃、校庭の片すみにあった古木の桜が、枝いっばいに咲いていて、入学の喜びと共に、世の中がパツと明るくなったような、ときめきを覚えたのを今も忘れない。

少し長じてから、強く印象に残っているのは、南北朝時代の歴史を教わった中で、楠正行が四条畷の戦いに臨む前、吉野の如意輪観音に参詣して、お堂の扉へ

「帰らじとかねて思えばあずさ弓……」

の歌を書きつけた……その挿絵に、さくらの花びらが七、八葉散りかかっているのを示されて、担任の先生が

「いにしえの武士は、君国の為にはこの桜の花の散るように、命を鴻毛の軽きに比して戦場に臨んだものだ」と話されたことである。

この思想は、その後連綿として若者に受け

川柳中山道六十九次：（14）……………富士野鞍馬……………（28）

近作……………諸家……………（45）

句の旅・花の旅……………（同人特集）……………高鷲亜純……………（29）

岡村久志良・国弘半休門・香川 醉々
三井 醉夢・井上 湧三・大路 美幸

第21回大萬川柳大会……………一三夫・岳人……………（46）

奇術……………村田瓢太……………（44）

雅号ぶっちゃげばなし……………長野文庫……………（63）

初歩教室……………本田恵二朗……………（50）

大萬川柳「プラス」……………川村好郎選……………（52）

柳界展望……………（庸佑）……………（54）

本社三月句会……………川口弘生……………（62）

各地柳壇（佳句地10選）……………加藤貞山選……………（48）

「居眠り」……………永藤弥平選……………（48）

「抜け道」……………三井醉夢選……………（49）

「幕」……………（三夫・葉子）……………（63）

編集後記……………

座右の句

酒とろりとろり大空のこころかも

（路郎）

私の句

かけっこしてるばくの雲 君の雲

村上春巳

継がれ、大東亜戦争の末期に、祖国の航空基地から毎日何十機もの戦闘機で飛び立って行った、不帰の少年航空兵の胸にまで生きていたのであろう。

しかも、彼等制服の七ツ釦には、象徴の桜花さえ打ち出されていたことも、今の我々にとっては悲しい思い出の一つである。

それにつけても、「年々歳々花同じ、歳々年々花同じからず」という詩は、たぶん中国人の作であろうが、仏教の教えにも通じるこの詩も、桜花と人生を対比して、深く考えさせる真理を含んでいる。

思えば四十年ほど前、夭折した私の長男が水癌で入院していたその年の三月頃

「父ちゃん、治ったら公園のさくらを見につれて行ってネ」と何回も繰り返していた。

だが、その望みも空しく、兼六公園の桜もそろそろ咲き初める四月なれば、彼は不帰の児となつてしまった。

その時、心ある旧友からの悔みに添えられたのが、前記「年々歳々」の詩であったが、私が今日まで、苦しかった生活の中に、信仰の光明を得て生きつづけて来られたのも、「さくらを見たい」と願って逝った愛児の仏心と、この詩のおかげだと感謝している。

如意輪堂武士の肩に散る桜

天守からむかし殿様見た桜

由良之助まだ来ぬ庭に散る桜

散るさくらまた来年も咲く桜

咲いて散る桜は無言 胸を刺す



中島生々庵選

倉敷市 小野克枝

どの顔も精一ぱいの春の色
欠点が判り気易い仲となる

値打ち無き形見押し戴いて帰り

作曲者不明の唄が淋し過ぎ

買ひ物が両手に持てる自動ドア

香川県 三井酔夢

雪を掌にもうメルヘンに戻れない

恋の手を重ねた昔雪うさぎ

淋しさを飲めばいよいよ雪明り

古き文など雪の夜の刻惜しむ

野舞台で木偶のしぐさに涙する

青森市 工藤甲吉

春月願信善大姉によせて

妻昇天する手などを振り切つて

妻近けば地球も落ちてゆく思い

一葉の地にかえる朝風も無し

十本の指を組ませてさようなら
亡妻の名で来たダイレクトちぎり捨て

神戸市 小浜牧人

祈願する親と子の背に雪が降る

平凡に終る倅せだつてあり

お喋りの女が火種置いてゆく

捻子を捲かれてロボット踊るほかはなし

商売の酷しさ一円軽からず

岸和田市 高橋操子

よく似合う人に巻かれよ春の帯

春の帯後姿のままでよし

世の中の不思議と因果見せられる

成せば成る意欲を孫に見つけたり

週休二日愚痴る人にはひまがあり

松原市 谷垣史好

雪の降る景色の中の霊柩車

コンタクトレンズを見えぬ目で探し

待ち合せ恩師が先に来ておられ
風邪やつと治り皮肉が始めた
お位牌が見てはるてんご止めなはれ

大阪市 吉田圭井堂

複雑な気持ちで老齡金を受け

エリートのコースどころかハイジャック

わが身すら持て余してて人の世話

利潤みな追剥ぎ政治に持つてかれ

三枝の礼鳩の社界にだけ残り

宝塚市 傍島静馬

入学祝い子無しにつれない春が来る

オタメ紙だけでは子供がかわいそう

勲章を受けてへんくつ見直され

毒舌が止んで人生黄昏れる

ニンニクがはやり悪臭気にならず

大阪市 山川阿茶

結局は仲人から出た不協和音

婚前のデイトで飽かれ断られ

鉢植へさいた咲いたと梅一輪

ロマンスグレーへ若い女がぶら下り

階段の最後の一段念を押し

倉敷市 松下梁水

捨て石になる捨て場所を撰っている

不発弾抱いて都会に敗けてくる

曲線をさすが年期的裁ち鉄

不信感抱けば犬も身構える
虎の威を借る肩書が透けている

西宮市 島居百酒

おみ籤の通りでなかった宝くじ

内幕を聞かされ身近かな人となり

清貧を余儀なくされた落伍なり

慕情まだ消えぬ種火が魇り

買いだめをせねば下がると知りながら

鳥取市 両川洋々

内職で妻も値上げへ立ち向い

わが城を守るエブロン締め直し

砂丘にて

周遊券雨の砂丘も見て帰り

風紋の乱れ繕う風が抜ける

泣きに来て見れば砂丘の風も哭き

尼崎市 黒川紫香

落書をしつつ女の長電話

落椿よけた型して残る雪

捨て舟の雪をはらって冬の釣り

たまに來て湯気がうれしい風呂屋の湯

嵐の伊良湖

ぐぐぐと太平洋へ押す伊良湖

大阪市 天正千梢

働き蜂休む巢もなく縄のれん

弁解はおよし可哀想な旦那

喘息の恐怖春を喜べず

奈良のみ仏商業の手でよごされて
一つ嬉しいお祝いよせ書いてだいて

倉敷市

本田 恵二朗

お年玉あてにされるも幸のうち
趣味一つくらしの底にひそませる
重責をさも軽るそうにさすがなり
流行を着こなすセンスも母ゆずり
不平を知らぬ男同士よく笑い

広島県

高橋 鬼焼

逢える日の暦をめくる愛の手で
すきま風過疎の民話を寒く聞く
鈍行よ走れ故郷の灯をみつめ
しあわせは妻のみがいた靴の艶
雪の詩が消えるぞ春の陽がぬくい

今治市

越智 一水

実らない話いいたいことをい
すまぬなあそのひと言にかようもの
厚着して出た旅 ぬくい日が続き
朝、昼、夜ぬくめしが食え老たのし
節約へばあちゃんの知恵役に立ち

下関市

石川 侃流洞

保母さんへ元気に投げる鬼の豆
いい日和母にお寺の有難き
P、C、B いつか忘れて市場籠

ちよつとだけ積って雪のほめられる
腕で来いと力んで見ても平社員

大阪市

本多 柳志

古稀をまだ炎える火種はもち合せ
まだ三年は死なぬつもりの日記帖
怖い金借りて飾った開店日
一豊の妻になる気の貯金帖
一寝入りしたら誤解が解けていた

守口市

羽原 静歩

文鳥のウルトラCが羨まし
大衆はつまり張り子の虎だった
円満な顔が円満ふみにじり
割り切ってドンパン節でも歌おうか

初孫誕生

初孫のまだまだ遠い幼稚園

高槻市

若柳 潮花

来る来ない花占いは来ぬと言う
たと焼の格子戸くぐる下戸と下戸
戴いた煎茶で妻のさくら餅

伊良湖畔にて

靴ぬげば恋路の浜の砂が落ち
岬もう暮れてはげしい風の音

和歌山市

野村 太茂津

友の死に絆の強さが目にたしか
闇にいて溢れる涙はくやしいか

ご好意の枠の範囲で保証され
理事会で八方美人となる辛さ
朝令へ暮改へ庶民としての詩

堺市 高橋 千万子

組立てるうそにおどつた物価高
品不足先ず空瓶に陽が当る
盛装がチリ紙さげて戎橋
行先がわかる化粧の濃と淡
戎橋ネオンが消えてうそつけず

米子市 八木 千代

雪道往き交う真顔の人ばかり
手の抜けぬたちへ神さままで疲れ
柏手が澄んだ！叶えて貰えそう
もういいのいいのオルゴール閉じてやり
踏み出した足へ覚悟がついて来る

島根県 堀 江 正 朗

妻といて子といて暮らしのよさを知り
親ごころ届かぬ先の神頼み
聞き馴れぬ音へドキンと妻の留守
ひとことが気になりだしてなりだして
財布からっぽになって倅せに気付き

島根県 堀 江 芳 子

一日の留守鍵あける懐しさ
でのひらにまるめて潰す愚痴でよし
振り子だと想うわが身であまんじる

踏みしめる土あたたかし子と歩む
夢ちさくなつて夫婦の笑いかな

大阪市 児 島 与呂志

嫁った娘（二句）

喜びとはじらい込めて娘が帰る
先様の母さんに添う娘にしたし
正直に馬鹿がついてるいい夫婦
他人さんの事にふれまい今日も暮れ
俗物の倅しみじみ酒うまし

岡山県 浜 田 久米雄

煮え切らぬ男確かな耳を持ち
愛嬌のつもりくつくつ笑って見
斜から見れば瓜実顔になり
錠剤をこんなにくれて儲けとり

ある初老祝いの人へ

力瘤男盛りへ盛り上り

鳥取市 河 村 日 満

内孫初誕生（三句）

おとこの準備ばかりを笑う児が生まれ
出産通知へ非常呼集の如く起つ
百万円の重み片手で受取られ
道徳を投書で叱るゴミの山

富山にて

待合所で分け合うて喰うにぎりめし

桜井市 岩 本 雀踊子

どの指も大事手袋着せてやる
愚痴云わぬ母が勇者かも知れぬ
歩道橋帽子へ強い風がある

餅のかび落す二月の凡夫婦
手のひらにのせたうぬばれとけて行く

大阪市 川口弘生

居睡りも特技の一つ母達者
先方も連れがあるらし笑ろただけ

コーヒーを飲む約束へ月が笑み
意に副わぬ弟子も育てて定退し
写経する口おのずから経をよむ

大阪市 宮尾 あいき

朱竹の額へ置物の虎が吠え

長髪の二人ガムかんでるのが女
春日ざし夫の墓碑の肌ぬくし
久し振り夢の夫が優しゆうて
ひからびた心へ梅の香がしみる

倉吉市 奥谷 弘朗

前向きな意見が議事をくつがえし
凡人へ移り変りの世が激し

これ以上望めぬ椅子にしがみ付き
人生を手さぐりで行く面白さ
スローガンだけで春斗幕となり

伊丹市 小川 静観堂

散髪してサテンの見合いそれでよし

抱かれない妻にわかれて米寿ちかし

御手洗いの柄杓かるやかに春の水
掃き目にいろんな落葉が寄って来る
どの錠もこわされそうな型の錠

神戸市 仲 どんたく

指名手配この写真にも母があり
神の座を下りて金婚迎えられ

土屋主税

山鹿流太鼓へ舞台耳となり

黒塚

人間のあらを見られてからの鬼女

壺坂

眼があいて女房どのへ惚れ直し

泉大津市

村上 春巳

まるつきりおしやれしないのも困り

幸せが匂う娘の洗髪

こんな時父は唇を噛んでいた

バスが出て小さな寺に鳩と僕

絵馬ひとつひとつに人の嗅いする

松原市 玉置 重人

鉄扉一枚マンション武装する

寡婦年金確かに夫の愛を知る

信じる気になって女弱くなる

口出さぬつもりへ意見聞きにくる

靖国神社参拝

戦友が浮んで消えた大鳥居

竹原市 小島 蘭 幸

僕のスピーチへ花嫁さんも笑み
そんな氣にまわりがさせてくれた恋
追いついてからの歩巾はマイペース
朝の鏡へ笑って今日が始まる
制服を着るとおしゃべりになる僕

兵庫県 遠山 可住

定年へ表彰されたことがなし
未練断つ一つしかない道を決め
淋しさや君も同んなじ女なり
それぞれの調和がここへ寄って春
髪上げる仕草一つに春匂う

小松市 馬場 魚山

倦怠期里に両親ない弱味
生え抜きは生え抜きらしい芸の深味
馬の足舞台一ぱい馬が生き
内職の灯を消すに立つ雪明り
指先へ紙は冷たいものを知る

大阪市 河股 緑水

子育てに生きる勇氣を授けて
少女歌手恋の哀しさまだ知らず
ああ戦友歌えば歌うほど忙し
やりくりの妻の後ろで手を合し
貰うもの貰いさつさと嫁にゆき

倉敷市 稲田 豊作

古稀迎え善人の仮面もう脱ごう
亡父の寿命追い抜いた日の体操
踏み台にする人名簿持つ紳士
氣前よく首相は国の金を貸し
一合樹だ山盛りしてもたかが知れ

堺市 河内 天笑

にんがつの星は剣のふれる音
罪ひとつひとつが星になっている
満たされぬものを星座に打ち明ける
星屑もひとつの誇りもつ光
空つ風北の星座をさらう音

富田林市 板尾 岳人

鳥海山噴火

金剛山お前も噴火したからう
噴火するだけが男でない僻み
春霞金剛山はかくれんぼ
日本沈没金剛山は生きている
ポーズする金剛山へ雲かかる

大阪市 大坂 彤水

指輪して舞台作法も知らなすぎ
給食にパンの補給が要る寮生
粗相した犬、悪びれた目を向ける
犬小屋へ寒の冷い雨が降る
路の皮むいてる妻の手が無心

豊中市 橘 高 薫 風

象牙色 昨日の色と明日の色
端然と墓のような書家の墨
昼の月瓢湖に映る力なし
花つけて白鳥の首シクラメン
聞香の首かしげいる白鳥か

大阪市 不二田 一三夫

川柳のソルジェニーツィン氏も追われ
参加することに意義あり 浪人中
中卒を金の卵と申しあげ

寄席

戸籍では別れ高座では夫婦
サラリーが5・3・2というトリオ

大阪市 西 出一 栄

金婚祝賀会を謝す

満場の拍手に一寸面喰らい
感激の余韻一夜を眠らせず
祝宴へ心に咲いた雪割草
瞬けばそこに莞爾と白柳師

出雲市 尼 緑之助

あまりの寒さうどん屋客がなし
新を追うニュース変りばえがなし
反対と決め再開の席に着く
リフトから降り一人前のスキーヤー

大阪市 正 本 水 客

蟹の宿

物好きでよし蟹食いにきた海の雪
波は宿を呑もうとして岩礁のはしのはし
カニミソが箸に重たい冬の味
カニぞうすい満ち足りた顔見あわせる

岡山県 直 原 七面山

落葉かき集め懺悔の火を放つ
服エンジされど心の冷たかり
春なれや四十女のパンタロン
内幕を知ってモデルには惚れず

高槻市 福 田 丁 路

かかわりの無い利廻りアップ
聖とも何処か抜けてるとも云われ
太陽が満ちて人陰無い牧場
暁の清き流れが春を告げ

倉敷市 水 粉 千 翁

無力ともおもうわたしの重さ知る
冬の愚痴云わず寒紅梅が咲き
信念を通す無口としてひかり
子と歩く一步遅れて胸を張り

岡山県 浜 野 奇 童

うっ憤を妻の笑窪に笑われる
晩酌へ愚痴コロコロと舌に溶け
小過また重なる課長で暖かし
本心へ微かに触れたのに気付き

豊中市 戸田古方

おからだに毒それもほんととほんとです
健康があたり前やと思いかけ
くたびれた上衣よボクもくたびれた
本当の怒りあまりにも静か

藤井寺市 西 いわを

見る人の心にモナリザ魔女に見ゆ
御先祖の恵を受けてケチ通す
悪妻もひとつ位は良いところ
職人に今日の背広が似合わない

泉佐野市 阿 万万 的

お互いに出る杭ばかりの二度勤め
新居半年そろそろ不足も出て来ます
穂のかれたすすき野春待つ色少し
よく見れば羅漢苦悩の顔でなし

大阪市 福 井 野 迷 路

あやふやな記録集めてモンタージュ
本棚の中に一冊手垢の本
何くわぬ顔して嫌味聞いてやる
正月の艶出し過ぎて迂りこけ

氷見市 関 美 子

赤字線急行待ちの長いこと
花疲れ子疲れ母にスベアなし
引潮の愛へ振りむかない男
春の河口春の生活が流れ着き

門真市 福島鉄児

学歴の過信はいつか追い越され
和服着て座る仕草も娘なり
四十年今更愚痴も出ぬ夫婦
男と女ただそれだけの老夫婦

八尾市 香 川 醉 々

現代イソップ譚

人間の檻を覗きにくる狐
華麗なる一族虎も猫のうち
魚は木に登り日本沈没す
手を振って舞台を歩く猿かいな

岡山市 嘉 数 千代 香

人間砂漠へオアシスとなる亡母が佇つ
その風にリズムを合やす風車
泣けるだけ泣いてあしたの米をとぐ
呼び合つてふたりに長い坂でした

大阪市 江 城 修 史

義理一つ返せば心に灯がともる
移り気な女にはれた愛の果て
話す気になれず華麗な嘘を聞く

友病む

残り火のときめきもなく朽ちて行く

城陽市 大 鶴 喜 由

居心地の老いては老いのそばがよし
物不足の中に本場のポルノが来

うえに困る儲けに困る人種が居
狂乱の世相を他所に雪見酒

倉敷市 小幡里風

その事に触れて女のうす笑い
せめて大樹ゆさぶり下積耐えている
踏み石の耐えた丸みに訓えられ
素晴しい恋が鏡の位置をかせ

守口市 村田瓢太

耐乏はいつか通った同じ途
飛んで帰れば容態案外もち直し
この女に血潮わかった日もあった
言葉尻りにこだわり審議はかどらず

東京都 増田次章

内ゲバ頻発(一句)
ぬくぬくと育ってゲバ棒ふるい合い
紀元節歴史はもとにもどらない
野党連外国人のように云い
新米のセールスマンが見せる媚

愛媛県 渡辺曉童

どうにでもなれはまだまだ脈があり
まどろこしくも燃えに燃えたる恋明治
思わせぶりがすぎたさやあて
斗志にすぎて息がつづかず

東大阪市 久米奈良子

葭乃先生(一句)

福寿草八十路の春の健やかに
耳遠い母へ根気のいる対話
沈丁花春呼ぶ雨へ匂うなり
安産を祈る写経へ呱呱の声

富田林市 岩田美代

燃えつきてきれいに老いてる被布の房
木枯しも言い分あつての鳴咽たり
単純な正義感かも女です
はずむもの抱いて決らぬ帯の位置

富田林市 木村弥栄子

指先でつついて見てる好奇心
人生を裏口入門から初め
入るにも出るにも苦勞せまき門
耐えて待つ喜び知らず買しめる

富田林市 和田維久子

伊勢参宮(一句)

式年祭まぶたに残し倅祈る
傷心を忘れたように二人飲み
凍てた道踏みしめ女の遠い旅
叱る人なくてうつろな今日も暮れ

青森県 木村涼人

寒の月雪キュッと哭くキュッと哭く
綻も縫えずGパンよく似合い
豪雪も峠を越したりんごの芽
増収の方法も無く買控え

松江市 小林 孤呂二

それとなく新調賞めている値踏み

東大阪市 竹中 肖二

菜の花に囲まれ浄土にいる思い
入口で由来はとびとびに読んでおき

熱燭がなんともいえぬ氷点下

焦燥にかられ喫い過ぎさえ忘れ

出雲市 野村 岬月

何もせぬくせに勿体ぶった顔

菓子折について御無理が上り込み

おあいそに笑って又も値を変える

美しい昔に戻す牡丹雪

松江市 柳 楽鶴丸

世の中の矛盾が僕のエネルギー

こんちく性星をつかんで投げた夢

イブセンの女のような妻である

五黄の寅を我が家で飼ってます

鳥取県 清水 一保

ガソリンのせいにされてる待ちぼうけ

お答えをしますと言訳笑いかけ

生活の智恵では物価折合わず

町議選挙の陣中より

今日の日は暮れても閻魂まだ暮れず

堺市 藤井 一二三

株の値がうぐき血の気の出た笑顔

肌を刺す風を税務署持ち歩き

大河ドラマまた観光地一つふえ

それとなく新調賞めている値踏み

東大阪市

節約の美德を不自由して気付き

お隣りの掃いても掃いても散る落葉

淡雪へ一段冴える青木の実

マイホームもう一部屋が足りぬなり

奈良市 宮口 笛生

枯れるもの枯れて灰色の冬残る

捨てられぬ荷物の嵩で転動し

かあさんの墓かあさんがいるぬくみ

山代温泉

北陸線白一色の冬走る

大阪市 有信 新之助

軍靴から重たいクツをはきつづけ

真つすぐな腰で明治ははっとかれ

化粧がよくつく日男がかすんでくる

男から折れよと二月の雨が降る

大阪市 神谷 凡九郎

話し合う相手俺には壁だけか

生きて行かねば死ねば人間でなくなる

批判するつもりが自省の道だった

そやかてこれ借りて来た晴着

京都市 都倉 求芽

内職の妻へ内助の役の夫

用意した返事へ事情また変り

火傷する覚悟になったら火を消され
闇夜なら闇夜のように歩く道

倉敷市 野田 素身郎

病室の壁の白さともう三月
祝電の数から妻に負けていた
立春へ水虫対策にかかる
来ぬとわかつて傘が重たい牡丹雪

鳥取県 鈴木 村諷子

俺の銚子となりが持つて酌ぐと言う
偽せ男金は要らない振りで活き
指で突きやヒョロと転ぶいのちなり
老夫婦だけでしまつてもあはらうて

八尾市 大路 美幸

仇し野の冬へ浮浪児石投げる
浮浪児は浮浪児にだけ笑う
齒の痛み耐えて浮浪児空を見る
浮浪児に蹴る石が無い白い道

大阪市 金井 文秋

初めての雪がうれしい孫の絵だ
長髪のおやおや散髪屋の息子
子の育ち自分の城を持ちたがり
鼻ぐらいびうでかんどく紙不足

大阪市 小出 智子

子と二人鉢北へ
ペアで着て母子の夢を一つにす

ゲレンデに還らぬ若さ追いかける
雪を踏む女の性を憎みつつ
降りしきる雪わが愚かさを責めるかに

大阪市 柳原 静香

セツトして心の張りを取り戻し
忘却の彼方に残る愛と憎
子沢山個性の違いも面白し
臨月の娘へ母も身構える

尼崎市 高津 徹也

格調の高いしらべが痛たすぎる
エレジーをひくならせめて俺は笑おう
ほんろうをされた姿を演じ終え
友情とだけ手紙に書いて逝った奴

大阪市 西川 誓二

一叢の水仙がいろどる冬の庭
動きたくないのに玩具ねじ巻かれ
裏話聞けば聞くほど裏をもち
寂しくなるのも忘れ娘の荷拵え

橿原市 岩井 本蔭棒

能無しに役が来よった五十過ぎ
極楽を信じて逝つたらしい笑み
駅遠し早出の背中に月凍る
築堤へ雑草の価値見直され

つぶやけば心の届く星である
西宮市 藤村 ヌ女

夜桜のベンチ嬉しい人と居る
色っぽい噂が春の夜をつつみ
孫のかく太陽みんな笑つて

呉市 榎田英詩

母の背に十字架として子が育ち
もう妻は齡にも触れず肩叩く
道標のためにポストはあるごとし
鶏のなんぼ産んでも子は売られ

和歌山市 垂井千寿子

亡夫百力日(三句)

トロフィーもその日のままだ百力日
その白さハンカチの遺句思い出し
思い出を少し残して模様変え
テーブルマナー無視する事にきめる年^{とし}齡

竹原市 時広一路

色褪せた紙に墨色生き続け
一テンポ早く病棟日が暮れる
点滴の腕冷えて来てまだ済まず
逆らわぬ水逆らった日の恐さ

笠岡市 松本忠三

不覚にも入院
まだ手術しないですかと見舞客
病人にしてはイビキが大きすぎ
回診に一服喫つてゐるのを見られ
肉身の出迎えもなく友退院し

明日を見つめると優越感が開く
人間が人間を判断して夫婦
限界を知る花片となつて眠るのか
春の日のこころに叶うまで歩く

柏原市 大峠可動

万策がつきて心の眼が開き
水虫もすみにしなつた老の足
会釈する目が探つてゐる団地族
何となく最後の言葉氣にかかり

大阪市 室谷徹舟

細やかな抵抗ショッピングに時過す
ダイヤ手に空しい光りと見る孤独

大阪市 黒田真砂

叔父七回忌

温顔もあの日の儘に七回忌

店員さん結婚

芽吹く春幸二人して築けかし

大阪市 福井多蘭子

還暦を元年として立ち上り
還暦を一番風呂が温めてる
窓がないように話してよく儲け
病人のあまえ知つてゐる妻がおり

竹原市 森井菁居

沈没はすまいが日本住み難し

子供あれこれ

厚着さす祖母には祖母の主義があり
酒飲みの子にして酒を子がすすめ
百点をほめればあれを買えこれを買え

岡山市 川端柳子

面映ゆいから落書でそれとなく
心配なこと入り混じる万華鏡
一呼吸すれば何でもない余裕
迷う日は一心不乱の足踏みし

岡山県 池田古心

のしかかる重荷に耐えし腰も萎え
ああ言えばこうとまともな臍でなし
楽隠居猫と対話の雪ごもり
宜徳の火鉢あっても炭が無し

貝塚市 野坂つき子

おちてくる雪へ冬バラ話かけ
モンローの真似して寝たら風邪を引き
星座からずり落ちまいとする焦り

ああ奥村あき子さんよ

賢明な女へ悪い虫がつき

大田市 藤田軒太楼

負けて勝つ心のゆとりも年の功
盤面に向えば恍惚の人でなし
余生の楽しみ泉郷の旅を追う
年寄りの冷水そつとサロンパス

大東市 土岐トク子

人生は葦のそよぎよ群れで生く
羽ばたく息子さわぐ血潮は亡夫なのか
世界地図何とスイスの遠いこと

陽春羽田発つ

亡父さんの「万歳ーい」拍手に見送られ

鳥取県 川崎秋女

初孫

その昔唄ったネネで孫あやす

0才の孫に連休牛耳られ

おしめ干す空が晴れたよ陽も笑う

ハンカチの汚れ目立って旅終る

島根県 錦織文子

倅せな絹糸よ振袖を縫う

誓ってから見上げた空の高いこと

こんな時の言葉を探す電話口

安らぎを編んで火鉢へ夫を待ち

宿毛市 瀬田美知

紅椿ぬらしただけの春の雪

あいづちをうてばうったでからむ酒

傷なめて犬さえ自分で立ちあがり

平坦な道しか知らぬ靴だった

大阪市 西森花村

お浄土にちゃんと暮仇待っている

おケーキと言われて味が変になり

物忘れそれほど人相よくならず

名古屋市 吉田水車
轆轤機ひよつとしたらと思う日も

新幹線走りや走るでいやがられ
コッポリも化粧も重い舞妓はん

島根県 藤井明朗

辛抱は金や意見くいちがい
見栄張っていても女の道弱し
国民を道連れ春闘に裏があり

松江市 岡崎祥月

遠吠えの不気味我が足ふと止る
自家用車教育ママの運転手
最高のしあわせ老いの勤め口

八尾市 高杉鬼遊

着るものを着てストリップのめしを炊く
満ち足りた犬の眠りを哄えるか
禍ちの果ての夫婦と人知らず

松江市 中川晃男

花道の見得へ舞台はほつとかれ
いんぎんにこつちの出方がわれ
もう少し根性を見る手は貸さず

米子市 林瑞枝

電化しても一度恋いし長火鉢
幾山河短所愛して共白髪

ひっこむ術知つて杭で愛される

姫路市 隠岐不酔

なさぬ仲知っててかえらぬ金を貸し
お互も生身じゃからとつけくわえ
ローンつき只くれるよう客をひき

松江市 舟木与根一

陽のあたる空地と知って落のとう
末端の小売りも十円ほど便乗
寒椿ばかり或る女の計

倉敷市 藤井春日

裏切りを許して呉れる母がおり
灯を消すまい嵐にあおうとも
針のあるその口吻と知らず酔い

大阪市 河井庸佑

卒業

卒業証書受けたわが子をじつと見る
卒業へ思い出泉の如くわく

入学

学校は楽しいところと教えられ

松江市 恒松町紅

病院に居るとは知らぬ年賀状
病院に居て三カ日事はなし
ブリキチョコな初老が歩く松葉杖

兵庫県 河原みのる

苦しい時の神頼みそれでよし
何分も高齢という悔み受け
天壤は皇祖も保証し給わず

平田市 久家 代仕男

ストーブの芯を細目に雪見酒

自嘲くり返し頬杖うごかない

子のことに触れぬ日もあり子を思う

愛媛県 村上 旭童

その雪がもとの秘境にしてしまい

この雪の中でせかせか梅が咲き

いささかは聞える耳をもて余し

岸和田市 福浦 勝晴

死ぬことをまず考える年となり

サクラ咲くロマンの丘で何想う

球場の隅からカンと春の音

兵庫県 大江 秋月

国鉄の停年を迎えて

四十年の肩の荷おりの酒の味

終着駅人の情が身に沁みる

ただ一人乗るのにローカル線止まり

八尾市 古川 鶴声

ハイミスを装う姿にペンの影

物価対策Gメン

Gメンも矢張り与党の廻し者

目立たないところだけGメン調査し

出雲市 原 独仙

評判の点取り虫が左遷され

道楽をしたねと余技を賞められる

呼吸するだけでも年金ありがたく

大阪市 今西 章雅

強いられる節約 的が多過ぎる

廃業でいける倅かみしめる

産み月の娘へ未だかと妻電話

大阪市 中川 滋雀

吉峰寺雪路に業がまだ消えず

雛の春高嶺の花の段飾り

なに食わぬ顔で拭う手の汚れ

倉敷市 能登原 白水

半分の視力やりたい友ができ

カンシヤクへ愚妻一枚上だった

一息へ次の辞令を握らされ

岸和田市 葛城 伊三郎

鳶に揚取られてからの空騒ぎ

回しマイク最後は音痴歌う破目

平凡に生きて極楽忘れてた

鳥取県 森田 布堂

吐く息もせわしおしゃべり風の中

仏間から塔婆の値上げ聞かされる

急病が出た無医村を雪が埋め

米子市 増田 竹馬

大山を白一色にした寒波

梅の花盲しいの人にこそ匂え

春そこに梅の香りが告げに来る

岡山県 出原 敬一

はのぼのと明けて狩場の修羅の音

口開けて魂抜けた寝顔かな

造船工鉄の匂いをもて帰り

東大阪市 桑原 喜風

三宝に帰依煩惱がまだ去らぬ

古里に絶えぬ便りのある温み

福耳も飯場の友にひやかされ

倉敷市 竹内 翁童

運にのる自信は砂を金に変え

酒少しへらせと無情な診断書

インフレにたえる食卓に花一輪

八尾市 飯田 悦郎

スキー靴脱ぐと寒さが身にしみる

ぬかるみのいびつな想いの靴の裏

追われてる作業日記の文字で消す

笠岡市 高木 桃里

柳の芽浮彫りにする屋台の灯

酒が出て座が白けてる金のこと

廻り道して温かい句碑に触れ

宇部市 平田 実男

冬眠の蛙へ土をかけ直し

十円の手紙こんなに喜こばれ

離婚した友をうらやましとも思ひ

大阪市 河野 君子

繕いに老母生き生きと冬日射し
遠き子を思えば寒月更に澄み
従いて女の業か煽るもの

東大阪市 竹中 綾女

お向いが病院老境にある安堵

回転のにぶさへ皮肉宙に浮く

老夫婦ため息をつく市場籠

三重県 川上 大輪

振る旗もなく職安の列にいる

被告の座から男は逆転を狙う

射程距離の中で恋を泳がせる

大阪市 飛田 好一

脱ぎ捨てを拾いあつめる洗濯機

したい事してはつくりと死なはった

吸うて吐く息に生ある有難さ

今治市 原田 一風

オール2を発展途上と慰める

日本髪プラス和服で成人し

祝日に国旗も出さず鍵を掛け

富田林市 浅川 八郎

婆さんの木魚の響き朝を知る

乱れ髪必死の要求燃えに燃え

強がりか老化を言わず福白髪

岡山県 永宗 宗義

どう転けて見てもどんぐり背が伸びず

春斗へ井戸の蛙まで騒わき
老人の不満こたつへ追いやられ

大阪市 藤田 頂留子

人生だるまころんでもころんでも
つかの間を色どる都会の雪景色
見つかった写真掃除の手をとめる

米子市 石垣 花子

下落した株価値ひびかぬくらしむき
茶を入れて夜勤と交替する日記
思春期の霧中に青い鳥探す

東大阪市 落合 思月

先輩を超越してから蹴つまずき
往復をしゃべって足らぬ立ち話
ふるさとが心をよぎる飛行雲

島根県 榊原 秀子

玉葱のいのちみせる芽氷点下
のぼりきた坂しあわせな彩でみち
歩く日へ思い馳せらすベビー靴

島根県 梅 みどり

我が影を心に残す日を送る
七転び八起きで不足よせつけず
孫の守しながら母の唄浮び

茨木市 吉川 米子

カメラの前でちょっといい顔老人会
貧乏くじばつちり引いて威張ってる

大海でまぜつかえせるか ちりめんじゃこ

大和郡山市 森田 カズエ

コマーシャルタダやるように繰返えし
ニッコリと娘鏡台から離なれ
パーマ屋で並でよいかとたずねられ

宿毛市 山本 窓花

主人喘息で入院

病棟に枕並べた朝の冷え
看護婦の温かい手に脈読まる
今日も無事終る店舗の灯り消す

大阪市 木村 水洞

人間の知恵の過信の事故もあり
大予言などは気にせぬ長屋族

広島市 山田 季賛

学歴はないが飯場で強く生き
背の子がむずかっている立ち話

美祿市 安平次 弘道

万国旗世界は一つとはいかず
よちよちと追えばよちよち鳩も逃げ

新宮市 大矢 十郎

八時間かかる我家が社から見え
大声で子供叱れば客が来る

枚方市 宮川 珠笑

管巻いてみたいと猪口を受ける妻
渋滞に囲まれ外車持て余し

羽曳野市

塩満敏

かじかんだ改札パンチ空をきり
金網の保護で高層ビル誕生

倉吉市

渡辺 菩句

よく見ると彼もけものの面をつけ
象の目につい小使いを奮発し

東大阪市

斎藤 三十四

ローラスケート孫へ伝授の腰のばす
第二の人生という好きな道

島根県

小砂 白汀

秒読みの中で限界音に酔う
垣低くとなりと空をゆるし合い

松山市

谷 のぶお

法網は大魚を逃がすように出来
不愛想もお負けに買った物価高

大阪市

津守 柳信

性格が云わせる皮肉受け流し
大雪を喜ぶ若さ消えていた

菊沢 小松園

群鶏の一鶴ついに嫁き遅れ

働いて食うてる腕で抱き上げる

淋しさにひとりへひとり会いにゆく

似たとこにだんだん気附く夫婦なる

賽銭の行方追うてる初詣

若本 多久志

朝のしじま心安らぐ墨を摺り

今にして貴方の言葉と報われる

入試祈願OKとはおっしゃらず

古稀過ぎて久し娑婆っ気まだ失せず

諒解はしても納得しておらず

冬眠からさめたら灯油値が下がり

金があり過ぎて子供を叱り過ぎ

週刊誌毎週吊りビラだけで読み

末っ子がジョニ黒たらふく飲んで去に

助産婦学院入試

髪赤く染めて助産婦志望なり

春立てどこも歪んでいる世相

気の抜けたように老夫婦しずか

思慕ほどでないが別れのさびしき

水煮きのうちにはうちの温かさ

月並な挨拶だけで過去の女

能登にて

着ぶくれた塗師の無口とがむまじ

春や春揚げ翅の蝶の時国家

温泉の宿でうけとりのような踊見る

針鼠の愛情 針と針を組み

スカンクの愛は匂いでたしかめる

北川 春巢

川村 好郎

西尾 栞



清 博 美

(会 社 員)

〒214 川崎市多摩区三田 5-2-4

俳風柳多留廿五篇研究

一(二)一

清 博美・青木迷朗・室山三柳
八木敬一・西原 亮・入江 勇
紀内恒久・鈴木 黄・岡田 甫

は礎稿の通りでよろしい。

光景が目に見え。

光景が目に見え。

12 ニア人に足跡ひとり芥川
清―「芥川」は、摂津国三島郡にある小川で

13 おくの客一トかはねてかしこまり

14 一日の雛へハ桃の実をあげる

ある。在原業平が、後に二条の后になった女性をそびき出して、この芥川まで落ちのびた話は「伊勢物語」によって有名である。同じ事柄を詠んだ句に、
やわやわとおもみのかかる芥川
という佳句がある。

清―奥州辺りの片田舎から出て来た客が、あ
いさつのため合羽などを脱いでかしこまった
という句か。但し、この解は「辞彙」にした
がったもの。

清―雛祭は三月三日だが、雛をかざり始める
のは二月末からであり、一日には桃をかざり
始めたりする。二日後に花びらが開けば良い
のだから、一日にかざるのはつぼみでいい。
最初から花びらの開いた桃をかざっては、三
日になればすでに散ってしまうことになる。
以上、「桃の実」をつぼみと解しての駄当解
だが、「桃の実」をつぼみとした用例が見当
らない。また、桃の花の咲く頃に、果実があ
るのもおかしい。

青木―賛。

安五・松一

又しては二条の后すり下り
西原―礎稿では芥川を三島郡にある小川と断
定されたが如何なるものであろう。古来諸説あ
るが、京より五里の道のりを背負つての逃避
行は、雲上人にはどう考えても無理。むしろ
禁中の芥を流した大宮川の異称とした方がよ
くはないか。

室山―「川柳大辞典(辞彙)」の解は、別に
「おくの客」でなく「田舎客」でも通用しそ
うであるが、一応礎解にしたがっておく。
入江―礎稿賛。「奥の客」で「奥州」を暗示
している。

八木―「一日」の読みは、ツイタチではな
く、イチニチ或はイチジツであらう。

室山―賛。西原説の通りで問題のあるところ
です。

岡田―奥座敷へ通された客、従って、一家の
主人でも身分の高い人に会う場合。主人が出
てくると、座布団をあてて下からはずして
丁重に頭を下げるとか、あるいは最初から座
布団などにすわらず、羽織の下部をうしろに
跳ねて畏まっている状態。訪ねていった屋敷
が、商人なら大富豪、侍なら旗本邸あたりの

一日は春めいてくる土用はし
一日はむすめまかせの土用干
という句。

岡田―事実には無理でも創作ですから、芥川

が、商人なら大富豪、侍なら旗本邸あたりの

一日は春めいてくる土用はし
一日はむすめまかせの土用干

紀内一例句より八木氏説妥当と思える。
入江一同。次の例句が決め手となろう。

春三は花夏六には実を上げる 二七・24

「春三夏六秋一無冬」の俚諺をふまえたものだが、本句は春三月の雛祭と、夏六月の土用の雛に、それぞれ桃の花と実をわけて上げること詠んだもの。

岡田一同。

15 短尺でする色事の品のよさ

清一平安朝の昔、当時の公家は思いを寄せる相手が居れば、和歌を短尺にしたためて送り、その真情を吐露したものであった。同じ男女の間柄のことは云え、文を送ったり、直接行動に出るのにくらべれば、如何にも品が良く感じられるという句。

西原一賛。尻をつねるのは下品という意識が存したことになる。

入江一同。慢性栄養失調症の平安のヤサ男は、直接行動に訴えるエネルギーをもたず、もっぱら恋に恋をする、というように女々しく、抒情の世界に浸るばかりであった。その点「尻をつねる」に代表される江戸の求愛は、なんとヴァイタリティーに富み、健康的であったことか。

岡田一礎稿に賛。

16 かさをかす家の稲荷で雨がふり

清一蕉門十哲の一人、宝井其角が向島三囲稲荷の社前で、

夕立や田を三囲の神ならば

の一句を詠み、雨を降らせたという話は有名である。

この三囲稲荷は、三井家（越後屋）が深く信心した社で、同社のためには私財を惜しまず後援したという。

一トめくり半も三ツ井でもって居る

宮四・26

の句は、その辺の事情を詠んだものであるが、また越後屋は、雨が降ると貸傘を店頭に出して客の便を計ったことでも有名である。

以上、其角の句、三囲稲荷が越後屋の尊崇する社であったこと、更に貸傘をふまえて、本句は詠まれている。

三囲の雨以後傘をかし初

三三・9

西原一賛。

三廻りで下タにハおかぬ越後者

四五・8

岡田一賛。

17 六月の朝日雪と炭が出る

清一六月一日は、氷室開きの日であり、当日はまた、神田鎌倉河岸に炭市が立つ日でもあった。

本句は、それを詠んだもので、「雪と炭のように違う」という、正反対のものをいう場合の比喩を詠み込んだもの。

室の雪出す日は炭の初相場

八六・35

氷室開きは、寒中に貯えて置いた雪の室を開くことで、江戸では本郷加賀邸のものが有名であった。

夏物を冬から仕込御大祿

六六・15

梅の室から雪の出る暑ひ事

三六・14

水無月に梅につもつた雪がちり 三八・17

入江一同。氷室御祝儀。「加州侯御藩邸に氷室ありて今日氷献上あり」（『東都歳事記』六月朔日）。同日、鎌倉河岸に炭の市立つ。このことは同書にはない。『川柳年中行事』三三四頁に出ている。

岡田一江戸の氷室は加賀邸だけでした。

18 上ミ方の祭女のほくを出し

清一京都では、毎年六月七日から十四日まで、祇園会の祭礼が盛大に催される。この祭礼には「奴」と称される断髪男装、絆天姿に白い股もあらわにした遊女達が、神輿の渡御に供奉したものであった。

上ミの祭ハ氣のわるひ男が出

傍三・28

祇園会の派手ハ女の又を出し

三六・4

（女の又で奴）

室山一「女の僕」。「僕」はしもべで下男。

入江一同。

きようとい趣向ハ女郎のやつこなり

二三・22

岡田一賛。

古川柳の専門誌

『季刊古川柳』

〒214川崎市多摩区三田五二一四

川柳雑誌研究会

半世紀前の節約時代

東野大八

不況とインフレの共存(スタグレーション)が一挙に全世界に広がり、戦後最大の試練の年になると各銀行筋が警告しているような昨今のユウウツな日本。常軌を逸した物価狂騰とモノ不足。これだけはふれまいと性根に誓ったものとうとう堪忍袋の緒が切れた。

そこで、大正八年のスタグレーションの記録を載せた国民新聞の世相でも引合いに出して、現況の耐え難き不興感をせめてものむかしばなしでお茶をにごすこととした。

大正六年から七年間、国民新聞に連載された徳富蘇峰生「近世日本国民史」は、亡き父の愛読の書であった。新聞を丁寧に切り抜き、それを百回分ずつ上等和紙の表紙をつけて綴じ帖にしたものだが、蘇峰山人の稿述より、その裏面に点在する往時の世相、経済、文化一般のその方が私には面白いのであった。この稿はその旧活字もそそけだった、紙魚と父の手垢の底に拾った日載記事がいわば筆ネタである。

まずは社説から(大正八年七月二日付)

「大正九年度の歳計は十二億七千万円に上り、大正十年度の予算は更に増加して十五、六億に上るべしという。かくてわが財政は、膨張の上に膨張を加うるのみにて、その底止めするところを知らず、高橋(是清)蔵相の緊縮論なるもの、遂にその効果なくしてやまむとす。(中略)蔵相が魂を入れ替へたりという昨年秋季の交より以後が、わが経済界の狂熱時代にして、金融界事業界をあけて、極端なる変態を呈したるは、主として過去におけるわが当局者の放慢主義の罪なり。

その後今年三、四月に及びて、大恐慌をひき起し、混乱状態を呈して、以って今日に及べるは、これまた狂熱時代に伴う必然の結果にてその責は必然当局側にあり。今日商工業社会は不景気を極むるといへども、物価は高騰し、俸給賃銀は歳月とともに急奔せり。すべての施設、すべての経営、みなその経費の多きに苦まざるはなし。今日当局者が歳計膨張の最大原因は、つとにこれらが原因というは、当局者自らその穴を穿ち、自ら陥

るさまに他ならず。

原(敬)首相自ら原に火を放ち、蔵相高橋子、その橋脚の高きにまかすといへど、宙天の火柱の火烽げに紙燭を焼くに似たり」

第一次大戦時の好況に対しての、反動的な不況の現況を、と詳述した社説だが、今日の高度成長化の直後の、現況のマスコミの政府批判に似通つていよう。一方、国民生活の実態面はどうか。

「戦時中(第一次大戦)の好景気は、府県人の眼を随処に愕かしめること多かりしが北海道にても例外ならず。即ち戦時中は海運界において、木材より海産物、特に雑穀、澱粉がおよろくべき騰貴をみ、ために海に陸に一般浮華に流れ、特に畑作農民はいづれも金銭の入るにまかせ、汽車の如きは二等ならざれば乗らずと豪語し、遊山放蕩をほしきままにして金銭を湯水の如く費消せり。然るに戦後、好況時の価格は一挙に惨落し、好況に酔い貯蓄なき身とて今や農家の惨状眼もあてられず、加えて雑穀の不作により、昨年末は一カ村五十戸以上が離村逃亡の例も生ず。このため川上支庁五カ村は逃亡に陳情を云々」

「今日わが国内の物価騰貴、生活困難を訴うるもの声甚だ高く、この方面の情形より推すときは、今にも大騒動を引起し來らむかと思わるる有様なれども。他の方面についてこれをみると、わが国民の奢侈贅沢、放縱淫逸、今日の如く甚だしきは未だかつてこれをみず。(中略)わが国の今日の状態を上景気となすものあり、これが上景気とは、物価が

騰貴につぐ騰貴により、この間に買入れたる者、その価を利し、隠匿滞貨をほし、とし機をみて暴利を画せり。その利得せる金銭をもつて市内茶屋料理店の繁昌はもとより近県避暑地歓楽境に赴き、飲食淫蕩その豪奢を競う。わが国民のかくの如き奸族をみるに他方、旦暮に米価、衣服費は暴騰し子女を遊里に売る凶作地が続出しつつあり。まさに時や地獄と極楽の二面相を織りなげに交錯の世とは知れた。」(時事解説)

これも今様の日本に酷似していることだが、この時点で現れ出でたるは、国民新聞社が懸賞募集した「節約の実例」げにも歴史・世相はくり返すというが、余輩その当選作を次々読了して苦笑抑止に苦しみ、呵々である。

「昨年暮よりこの不景氣風が身にしみ、五厘一銭の節約を心がけ、只今は私一人で女中、書生、奥を兼職いたしております。かくなれば何事も自分の思い通りに出来、気持ちよく身心も適度の運動にて快適であります。節約は食事にうどんを月五、六日加えております。うどん粉一合二銭、それを四合八銭

麻生葭乃先生から

「水仙が咲いたよ仏さまへ切る」 一 水何と言う清楚な句でしょう。すなおな感情の吐露を愛します。川柳の批判ある自然観察、掘り下げた人間心理をあなたの句に発見してうれしく拝見しました。――後略――

(今治市・越智一水)

にてお汁(鰯節一銭、醤油二銭、油揚げ一銭五厘、葱五厘)計十三銭にて美味く頂きます。月に五回うどん食とすると年七円二十銭の節約となります」

「節約時代に入る以前より、私は二食主義にてもう三年を経過しました。駒込伝染病院長二木博士の説の実行者です。一日実働は八時間です。二食は適当で今では三食では腹にもたれます。日本の夏は空腹感が激しいので清水で補います。もし薬物などで水が欲しいときは、唾液を口の中で練つて胃腸にのみ下すと、腹中にて之が拡充され、ゆうに一時間以上はもちます。おかげで二食主義実行以来、胃腸の疾患は皆無ですごしました」

「木炭は炭俵で買ったとき、バケツ二ハイルの水をかけます。それをカゲ干しにすると、かけない場合の炭の消耗率に対し、二割も長持ちします。薪は皮の部分を下にして、根本をカマドの奥にむけてたけば、長持ちする。なお炭はかならずノコギリで小さく切ることです。たゞき割ると三割以上の損になる」

「夏になると御飯がすする。だからといって捨てるのは節約の信条に反する。すするのは腐敗するのではなく麴(こうじ)が発酵するからで毒ではない。古いおひつが新しいおひつよりすえにくい。理由は古いものは空気を通しやすから。めしをザルに入れるのはそれに通じているわけだ。なお小生は新案としてサカズキ一杯の醋酸を入れているが、効果絶大倍もつことを発見した」

節約に関する当選作は以上の通り。ケツ作

なのは、古新聞は湯殿の棚に置いておくと、湯気の湿気をふくみ、売るときは三銭分トクになるというのがあった。節約に関する当選作のめばしいものは以上の通り。最後に、節約を兼ねた柳詠向きの秘話がみつかった。点晴の結びにふさわしいので紹介しよう。

「近頃開会した上野健筆会展覧会へ、故熟鳳翁の遺族を敬慕し、日々出席無料揮毫していた川柳久良岐が、大画面に自画像を大書し、それを廊下に乾しておいたところ、一見会社の重役らしき一紳士が、ぜひそれを譲ってくれというて、いんぎんに名刺をさし出した。一見すると帝国大学教授入沢達吉であった。そしていわく、実は先年、国民新聞の家庭博へ、荆妻が一疊半の台所を節約厨房の趣旨に立ちて陳列したところ、先生が

「家庭博一疊半で落(おち)をとり」

という川柳を国民新聞紙上にお出しになったが、それ以来私は先生の信者となり、今日閉会間近かと知り一眼拝顔すべく来場した。荆妻も同伴することになってしたが、小児の工合あしきため、私だけと相成りました。ついでにはさきの一書のほか宅への土産にその一疊半の川柳を扇子へ御揮毫願いたいと謙譲の態度で懇望された。久良岐翁、これも川柳普及のためと快諾、望みに応じたとは、いかにも川柳子らしき振舞というべし。

古方手書き句集

送料共 八〇〇円

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 葉

驚を啼かせ理髪店も値上げ

西 田 実 男
いわを

この頃の値上げ以前から、値上げの最右翼なるものに理髪店がある。行く度に値が上っていた。初めのうちは抵抗を感じたが、この頃ではどうにでもせいという気で、散髪椅子にかけている。作者もこんな気持で、あの上げ下げ椅子の上で目をつむって、髭をあたためらっていたのであろう。と突然良い声で驚が啼いた。散髪代を値上げした代りに、驚の良い声をサビスしよつたなど、作者はニシマリ笑ってこの句が出来たのである。昔から理髪屋の主人に、万年青に力を入れたり、驚やかナリヤを飼うたりする人が多いから、この句一読して、その雰囲気は想像されて、まことに愉快である。流石はベテラン作家である。因みに、作者は私のように禿げていず、年のわりに髪がフサフサあるので、散髪の数も多いことであらう。

和服着て歩く男がきざに見え

平 田 実 男

環境とは周囲とはおそろしいものである。和服ばかりの時代には、洋服を着たら、きざに見えたにちがいない。自分は日曜日など一日中和服だが、一寸心齋橋へでも出かけようと思つて、その儘着物のままで出ようとするのだが、何だか気がひけるので、わざわざ洋服に着替る場合がある。一読して、私生活も、周囲との調和がこんなにも、むずかしいものかとつくづく思われる。それにしても、日本に居る、韓国の女学生が、あのチヨゴリとチマの民俗服を堂々と着て通学する姿は、立派なものだと自分は感心している。

痛い程シャワーを浴びて疑問閉じ

岩 田 美 代

シャワーのバルブを満開にして、痛いと思う程頭から浴びる気持は、大げさだが、龍壺に立つ文壇上人のようである。作者はこの日、何かがあつて心にひつかかっているのだ、この心のひつかかりを解消するのに、シャワーを痛い程浴びて、身心共にさっぱりしたという心境を詠まれたのである。

常々好作家として敬服しているが、今又更にその感を深くする。第一句の

『歌留多とる過ぎにし恋の声上げて』も亦感歎の声を惜しまない。過ぎにし恋の声とは、いみじくも詠いつるものかなと感心している佳句である。

中立へ右派と左派との年賀状

原 田 明 春

元日のホーム炬燵に入つて年賀状を見ていくうちに浮動票の一票を稼がんものと、右派から左派からの年賀状が、前後して出て来た、之を見て作者は「僕は中立じゃ」と初笑いしている情景が目につつて愉快である。

昼休み役場へ行けば昼休み

鈴 木 村 諷 子

句意が判然としているので、解釈の要はないが詠み方が非常に面白い。作者の経験であるうが、一寸も怒っていない。舌打ちもしていない。成程役場ハンも、昼休みやな、ハハア左様か。という一句である。常に私は時差中食というものが出来たら、どんなに時間の節約になるだろうかと考えている。官公庁のおえら方、いやその衝にあたっている人は卒先して、時差昼食をして民衆の便宜を計つてやっていただきたいものである。

役どころ心得て来る割雲着

出 原 敬 一

時には見通ししやすい句である。仲々上手な句で、その情景も皮肉があり、諷刺があり、環境も想像されて面白い句である。刺烹着の下には、チャンとした立派な着物を着ているかも知れない。別の包みには、裾模様か或いは喪服が入っているかも知れない。然し兎も角、自分の立場を考えて、一応刺烹着姿でやって来たという、いじらしい女性である。ここまで考えると、考え過ぎかも知れぬが、この句から、心得てという言葉でそこまで想像される。

佳句中の佳句である。

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

橘高薫風

極楽浄土行けば便りもしてくれず

秋月 宏方

肉親を亡くしたものの淋しさである。常識では至極当たりまえの事柄を真顔で表現している。情感の一番手近なるもの、それはありふれたものに違いないが、生れた赤子が直ちに乳を飲むような、自然の力強さがある。

万物のところを得ている元朝

宮崎 美津子

「お元日坐るところへ坐らされ」これは路郎先生の句で、家長以下一家族の新年のけじめがよく描出されている。万物の句は、それを視野広く捉えたものである。語尾の字足らずが句の特徴で良し悪しは個々の見解で異なろう。「元朝万物のところを得ている」とすると、放哉、山頭火スタイルになる。

人目には仲良く見える手内職

櫻村 ふみよ

袋張り一つの内職にしてからが、紙を折る役、のりを付ける人と分担を決めて運ぶと手

つとり早いであろう。通常母親一人がこれを行い学校から帰った子女が手伝うという風であったのだが、現今のはどうなのであるか。不本意乍らの共同作業の心理がよく出て

日の丸に一礼やおら席に着き

大本 バット

演壇のある会場、正面には日の丸。開会数刻前のスケッチである。校長が市長が知事が大臣か。最後の人物が大きな花で胸を飾って登壇すると開会が宣せられる。

声だけは年を取らない久し振り

中谷 利美

句にとって発見というものの大切さを思わせる作品である。これは私の母のことだが、老来耳が遠くなるに従い、自身も大きな声で話す習慣になって、声はいよいよ艶やかになった。

拝観料ここもか京はしんどおす

竹内 花代子

京都や奈良の観光は少数箇所をじっくり時間をかけて見ることである。タクシーを飛ばしたりして欲ばると、拝観料の高ばること。

着飾った口から着飾った言葉

川上 富子

一張羅を着ると他所行きの言葉が出る。殊に女はである。

ひよいと顔を見せて明日は二十才です

三宅 不朽

二十才頃の青年の気まぐれが出ている。話せる伯父は小使いが欲しいのだからと察す

る。

知事認可額に掲げて風呂値上げ

伊藤 一郎

王様がすぐ入れかわる物不足

高野 不二

買い溜めの予算廻して寝正月

麻野 幽玄

ここ半年の間の物価の狂騰はすさまじかった。これらの句は、それぞれユーモアを加味して、やりわりと批判している。

ビタミン薬ただなんとなくなんとなく

内藤 ますえ

なんとなくの繰り返えしが、ビタミンという薬品の性質を象徴している。ビタミン剤は効く効かぬとの論議を聞くが、利用する側もなんとなくの気休め程度のものなのである。

言い負けて黙々と読む学術書

西本 保夫

事口論にかけては男は妻に敵わない。言い負けて黙りこくって読むのは自然堅い本である。いよいよ依怙地に己れを閉ざすのである。

停年の沓下を脱ぐ誕生日

新川 貞祐

勤めのための靴下を何度履き脱ぎしたことか。停年を迎えた感慨が誕生日に極まった。

東京へ電話掛けいと云う手紙

加藤 茶人

目上の人物からの手紙である。長距離電話をして来いという内容のものだ。自身から掛けようとせず手紙で云って来たところ、錯倒した面白味がある。

▽前号P46下段18行目訂正「貧しさは何でも両手でつかむくせ」阪上千止庵氏作。

川柳 中山道六十九次 (14) 富士野鞍馬

64 高宮

鳥居本より一里半(五・九キロ) 此駅は、布織類を商ふ家多し。此ほとり農家に高宮織細布多く織出すなり。これを高宮布といふ。宿中に多賀鳥居あり。是より三十町許。

多賀大社は、天照大神のたちおの御神(伊弉諾尊)にてまします。伊勢参宮の輩、道を枉てここに多く詣するなり。例祭は卯月二の午の日、これを拝まんとて遠近の人々高宮町に群集して賑ひける。

65 愛知川

高宮から二里八町(八・七キロ) 此宿は煎茶の名産にして、よく水にあふなり。銘を「一溪茶」といふ。

安土山古城。総見寺山上にあり、天守の跡に信長公の墳墓あり、今に城中の石垣存せりと園会にある。

安土城は信長の居城で、天正四年に起工して同七年に完成した。武將の權威を象徴として、同時に住居としては最初のもので、壮麗なものであったが、天正十一年(一五八三)六月十四日、明智左馬助が天守に火を放ち灰燼となった。

天正七年(一五七九)安土の浄厳院で、日蓮宗と浄土宗との宗論に、信長は浄土宗を勝と判定した。

本能寺安土の意趣で高みで見 (拾五二五)
——本能寺は日蓮宗

天正十年(一五八二)五月に、徳川家康が安土城へ挨拶に来たとき、明智光秀に接待役を命じられたが、これを急にやめさせて、中国へ出陣の命令した。これを光秀は怒って、六月二日本能寺を攻めて信長を自決せしめた。

御馳走が尽て光秀尻を喰ひ 三輔(七四三四)
ぶたれちやあきかぬと寄せる本能寺

66 武佐

愛知川から二里半(九・八キロ)

武佐墨を持って焚燗はんかん叩くなり (拾六一〇)
という川柳がある。此処で製出する墨は、形が盾に似ているので、焚燗の盾に附会したのである。

これより西の方へよりて八幡へ五十町。
八幡は、此辺の都会の地にして商人多し。産物は蚊帳及び布織、畳表、円座、灯心、蒟蒻等なり。

蚊帳売の声のいいのを女房呼び
蚊やうりはめりやす程なふしをつけ (傍三二三)

——江戸へ売りに出た
鏡山。街道の左。

鏡山いざ立よりて見てゆかん (六二)

年経ぬる身の老いやしぬると

大伴黒主

鏡山通りすがいに寄た歌

如雀(二七18)

鏡山うらは湖水の天下一

定岡(六〇10)

年へぬる身も秋さびの鏡山

管子(八一31)

小倉から時雨で見えぬ鏡山

錦糸(二四〇6)

鏡の宿。武佐から一里半、むかしは駅なりしが今は馬次なし、旅舎多し、と図会にある。むかし牛若丸が止宿して、強盗を退治たという旧家がある。これが赤坂の熊坂長範として伝えられている。

老蘇おいその森。

いとせめてなを憂ものは春をへて

近作

高 鷲 亜 鈍

一茶より年を喰ったなあ六十五
僕という誤植だらけが眼にきたる
頭から水を浴びたる寒の入り
かくて死は誰でも一緒呆っ気ない

老曽の森の鷲のこえ 為家

四十から老曽の森へ飛んで行 (武二)

67 守 山

武佐より三里半(一三・七キロ)

守山といへど所は坂の下

二疊(二一六四)

当宿の入口に守山川あり、橋詰に称名寺といふ西本願寺末寺あり、蓮如上人建立也、金ヶ森より此所に移しけるとなり。

守山の岑の紅葉も散にけり

はかなき色のをしくも有哉 貫之

野洲川。ここで布を晒す、至て白し。

挿絵に描かれて、三上山が見える。

三上山。一名杉山ともいふ。登路十八町、廻り五十町。俗に蜈蚣山ともいふ。秀郷の由

脱ぎすて脱ぎすて皮膚まで剥がんなにもないからなにもないのだ

百歳は孫の寿命をプラスして

新世紀子ら孫達にまかしとく

宿縁が曳きずりまわす男女かな

生れ代って犬になる僕

魚も肉も口に入れてから

生物が減ってカビ増えてくる

縁よりいひならはしける。絶頂に八大竜王の

祠あり、毎歳六月十八日竜王祭とて、遠近来

て登山す。と図会にあり

依藤太秀郷は、三上山を七巻半したという

大蜈蚣を退治たという伝説があり、

秀郷のはまれ七つと七つ半

貞龜(九八20)

七巻と七変化とを藤太射る

青我(四二23)

——七変化は将門

大きな虫けらの出たは近江也

(一五5)

三上山秀郷が来て帯をとき

(宝十一礼3)

八景の外へ這出す百足山

木刈(二三〇9)

篠原。平宗盛、清宗は、寿永三年(一一八

四)捕えられて鎌倉へ行き、また京都へ戻さ

れる途中、六月二十一日、此処で父子とも斬

られた。時に宗盛三十九、清宗十七才であつ

た。東方に墳墓がある。

宗盛はまぐろのやうに扱かわれ

五藤(七六11)

川柳百人一首

― 次回作品



川村好郎選

米子市 佐伯越子
着飾って見ても育ちはあらそえず
出稼ぎに異郷の朝は冷た過ぎ

能面の裏に女の意地を見る
新婚の家庭に添わぬ客で居る

大阪市 阪上十止庵

胸ゆたかなる石女いしむすめの哀れとも
ひとすじの髪が倦怠期をつなぐ
朝の陽へだんだん働く顔になり
他人に娘をやる大安の日を選ぶ

東京都 山根白石星

冤罪に泣いた日からの金を貯め
メルヘンの月に無惨なクレイター
此の世での序列通りの居士信女
身の底のサタン聖書をさかさまに

姫路市 大原葉香

吊橋の怖き流水無表情
娘の縁談婦唱夫随でめでたがり

敬礼で見送る列車定時発
肩書きの数程顔のしわもあり

八尾市 高橋敏子

画廊の一角 椿一りん呼吸する
シクラメンすこうし憂いた女ひとに似る
付き添いの可も否もなく病い快し
友情の仮面のずれをふと覗く

羽曳野市 麻野幽玄

再会の酒だ糖尿伏せておこ
葬列の中の私も糖が下り
たまさかの夢の逢う瀬の亡父無言
不覚にもタンポポ屋根へ根を下し

三重県 川上富子

いたわりの心が愛となる過程
たしなみにしては唇赤すぎる
幸わせが続く夫の声がする
淡々と聞き流される人の恋

和歌山市 津田与史

札所巡りだけ老妻と意見合
汚れた世も同じ白きで梅の花
電話鳴る幸も不幸も同じ音
田満に話がついてまた他人

愛媛県

小山悠泉

売る方も高いと思うキャベツの値
嘘一つ一つ世間をせまくする

神経痛遠慮会釈のない寒波
又年のせいにして置く物忘れ

鳥取市

大塚豊生

温泉へ来てまで妻は毛糸編み

うす味へ妻の氣遣う老いを知り

育児日記明治の智恵も借りてくる

どん底に耐えた日記を読み返す

鳥根県

槻谷一葉

波に身をまかせて水鳥くずれない

追いつけぬ物価へゆっくり歩を運ぶ

感覚のずれで話題も途切れがち

そこまで止って下さい口車

守口市

野呂杜月

孫の智恵日に日に積木高くなり

豆炭に心ぬくもる故郷の家

各停で辿りついたり古稀の春

保証ない祈禱料とは知りながら

大阪市

神夏磯道子

念入りな口止め酔えば思い出し
幸福は隙間探して逃げたがり
相談して心の底を見透かされ
煎じつめて見れば女の妬み心

柏原市

小谷葉子

冬の陽へ心を洗うように立ち
再会へ北風そつと通り過ぎ
罪つくる女の封書白すぎる

焦点をしぼってあなたを信じきり

和歌山市

秋月宏方

酒くせを駐在さんにも認められ

北風に枯草小さいタクト振る

結婚はまだ考えずスキー帽

竹原市

三宅不朽

春そこに白柳句集のうすみどり

おふくろも若き日思うぼたん雪

また聞く計雪しんと胸に積む

鳥根県

谷岡芳枝

目ざめては鳥の声きく生きたしと

降る雪へ猫ふんぎりのつかぬ鈴

寝たきりへ悲しいまでの空の碧

吹田市

吹田三郎

人生譜訂正印の押しどころ

新名所新建材の城ながら

二上山頌

商魂は危機を商機にしようけ

石川県 同 村 花 仙人

不景氣が来そう神様いそがしい

民宿で泊り宿題たのまれる

家出して来たといひよっこり妹来る

大洲市 堀 内 曉 風

良い話晩酌追加する

勝算は互にあつてする握手

意地張つて見たがやっぱり夫婦です

和歌山市 吉 野 富 子

衣食足りながら幸せうすい寡婦

寒がり暑がり夫婦の設計図

さみしさに誰かと話す電話口

神戸市 佐々木 静 泉

使うだけ使い廃車は積んどかれ

国なまりを故郷で温ため三カ日

土色の雪にもはしゃぐ神戸の子

尼崎市 中 谷 利 美

よくよくの事情ひとりで飲む女

後添いの話ちらほら一周忌

そのうちで怠け者ですくすり指

和歌山市 内 芝 としよ

一輪の花にも花の使命あり

化粧法真似てはみても年は年

嫁となり姑となりつつ長い道

鳥取県 林 露 杖

抜け殻となつても女嫉妬する

追従の裏で妬心の爪を研ぐ

興信所頼るほどでもない不信

大阪市 小 谷 清 女

老いて尙笑顔女は絶やすまい

事なかれ主義の顔々繁華街

無けりゃない暮しの知恵が湧いてくる

岡山県 谷 川 渥 子

敗北の握手へ笑顔ととのわず

歎さびるひまなくしぼんだ夢を抱く

縋る瞳へカルテは筆をあらためず

弘前市 小山内 貞 男

人生の中程あたり悔多し

せせらぎの流れに心浮べたし

缺席と言う策あるを忘れてた

竹原市 脇 本 政 己

若い日の恋を育てし女の計

つららからばつりばつりと春が落ち

明日は出す手紙疑わぬまま眠むる

羽咋市 三 宅 ろ 亭

二度三度言う癖抜けず元教師

寄り合いの激論ウィットで緩み

路のとう憂いを秘めたのも混り

備前市 武 内 雅 堂

台所預かる主婦の爛さまし

泣くことを許さぬ父の不発弾

海に強い男が虹を呼んでいる

和歌山市

樫

村

ふみよ

変りない日のしあわせの米をとぎ

一人よし友よし孫は尙樂し

煙草吸うくせは昔のままで会い

今治市

大

本

バット

目刺し焼く匂い応接まで届き

塗箸で食べさせている安い店

酌いでやり飲んでやるのも聞き上手

今治市

真

山

国彦

遠慮なく母親叱る娘に頼り

訓読をして心経が解りかけ

クジ運の悪さは年賀ハガキから

高槻市

竹

内

花代子

来客を口実にして切る電話

何となく心に沁みる朝の雨

一姫を抱いた写真を送って来

岸和田市

池

田

香珠夫

いつまでと分らぬ余生だからよし

長命をせよとは言うが放つとかれ

過ぎたるは及ばず雪のスキー場

貝塚市

行

天

千代

バーゲンのとばっち子孫預けられ

女一人ピンクの風が吹き抜ける

お姑は留守らし娘の長電話

仙台市

川

村

映輝

齒の疼き五体隈なくかけめぐり

浮き沈みしてきた過去をなつかしむ

孫の泣声電話で届けられ

今治市

渡

辺

南奉

平和には遠い声なり鳩の鳴く

マイホームまだ利子だけを払ってる

日曜の朝僕だけが通る道

和歌山市

沢

山

福水

年二度はあなたに会える彼岸花

地の果ての向うに飢餓の国があり

春は神秋は家裁の多忙なる

大阪市

鈴

木

生仏

便乗でもうけた人は横をむき

にはか雨ぬれこちよし露天風呂

老人は首長くして春を待ち

大阪市

内

藤

ますえ

縁のない話聞いとくだけにする

蟹買うて山陰らしい冬の旅

もう少し話してほしい裏話

守口市

岸

本

豊平次

来るものと信じてターミナルに立ち

トンネルを出れば故郷も雪の国

東大阪市 崎山美子

お世辞を言いつつ晴着の値ぶみする

娘の晴着ボーナス全部もってかれ

青森県 荒田つる

色も香もあせてもっぱらまとめ役

羽ぶりのいい頃の写真はヒゲもたて

大阪府 堀口欣一

詩人の訃小さく載ってそれによし

煮凝りの味もやっぱり鯛は鯛

須賀川市 平栗金太郎

買い溜をしないで済んだ妻の知恵

節分会古稀を起しても年男

新潟県 高野不二

会社つぶして組合残る気か

まだつかぬ管郵便まだ出さず

川西市 氏林洋敏

通知票先生に見る目ないと言う

予備校の隅でひっそり二十才

寝屋川市 江口度

混濁の世に匿名の寄附光る

家計簿は正直妻の買漁さり

寝屋川市 井上武松

豆まいて追出した鬼胸に棲み

値上げしたあとは値下げで客を呼び

堺市 栗本藤持

初恋を校友録で探し出し

病室の暖房の音が朝を告げ

豊橋市 鎮浪翠月

つり銭を貯めて小さな夢をもち

頑固さがとれたら急に年をとり

大阪府 平井露芳

レコードのB面のようなわが人生

また値上げ定価の上へ定価張り

大阪府 横地正影

ご大事にと耳鳴り私を追っかける

春ですと鉢の萌芽が叫びそう

樺原市 西本保夫

まだ暗い朝へ足音平社員

平社員ゴルフバッグと乗り合わせ

大阪府 大國たかし

途中下車軽い財布が義理を欠ぎ

鍋物で風邪を忘れた頃がやま

新潟県 市川一峯

豪雪にダブルパンチの物価高

物不足泣く人こっそり笑う人

寝屋川市 福富隆子

指先の怒り棚上の皿も破り

安い物はずんだ声で妻帰り

新見市 吉田落猿

落の蒙越し方の味かみしめる

双方の愚痴温める老夫婦

河内長野市

井上喜醉

肚決めてしまえば酒のうまいこと
お題目あげてる妻の別な顔

西宮市

両川康博

過去胸に秘めてピエロの役を買い
出直しのチャンスにがしたコップ酒

伊丹市

樫谷漫柳

川柳塔購読

創刊の年より古しわが馬齢

雅号などおこがましいが辞書を繰り

豊中市

安藤寿美子

卒業へママの便乗する新調

頑固もの後姿は淋しそう

鳥取県

大坪天涯

失敗もあらうと笑顔で励まされ

奇形魚を釣ってもみたい糸を垂れ

鳥取県

福田保子

トランプへ占ってみる岐路にたち

離農する決意へ米価はね上がり

呉市

佐久間文明

冬枯の道遠さかる愛となる

炎えるものに秘めて時を待つ

大阪市

花田繁子

すっぱりと自分に浸る夜が好き

値札見てびっくり出した手のやりば

鳥取県

加藤茶人

好きだったお酒も墓へ掛けてあげ
隣席と黙ったままの旅続く

赤穂市

谷口赤童

大袈裟に言うな魚は生きている

トイレペーパー赤ジュータンを吹きまくる

鳥取県

福田陽山

虎の年世の中益々荒れほうだい

暮しよい世になるラッパ鳴りもせず

松江市

岡崎雪美

口喧嘩部屋の空気を入れ替える

なみだなみだただそれだけで掌を合わせ

岡山県

長尾保

野仏も歩いてみたい春うらら

年度末予算が余まり叱られる

鳥根県

宋戸千草

尻尾だけ喰ってるわたしの太りよう

貫通のよろこびへ騒音がまんする

松江市

梅本登美也

男運悪い女のタバコの輪

あとはもう附録と思う齢になり

八戸市

安田勝己

ポスターが笑って天地吹雪する

頼りないが言うことだけは理に叶い

闘病記

やせかけてこんなに骨があつたのか
病床にも夜が明け今日も生きていた

今治市 伊藤 藤一郎

同じこと云うても嫁と娘の差
簡抜けにさす魂胆で耳打ちし

今治市 今井 松花

此の前と違ふと易者詰め寄られ
撫で付ける前の逆毛は鬼女のもの

今治市 古野 伶人

待っている間の暖房で気が和み
朝寝する寝巻を剥がす洗濯機

兵庫県 高橋 近江

監督が一時働きしてみせる
まだ辞せずいずれなんとかなるさ主義

高槻市 山田 スミ子

父ちゃんの命輸血でやっともち
付添いの夜父の寝息を確かめる

前月分 呉市 佐久間 文明

つかかる言葉やさしく受けとめる
残菊の花のいのちの尊くて

岡山市 岡 英好

夜泣きする児に失格のパパとなる
故郷の土地踏む時は酔っている

大阪市 秋田 茂

いつわりを許さなかつた青い空
「ありがとう」の五文字がなんと重き日よ

今治市 渡辺 伊津志

お別れの筈のルーシュが濃うすぎる
欲望のドレイになつて威張つてる

島根県 岩田 三和

今年また年賀の欠けた友二人
山土を撒布芝生の春を待つ

大阪市 新川 貞祐

妻の留守窓から風が吹き抜ける
鉄筋の家にそぐわぬ寒椿

鳥取市 勝山 紫宏

老友の墨痕変らぬ年賀状
秘中の秘わたしの鶯餅つくる

大阪市 須浦 つね

雑草も逞ましく伸び笑つてる
つんぼさじきにされたされぬと腹を立て

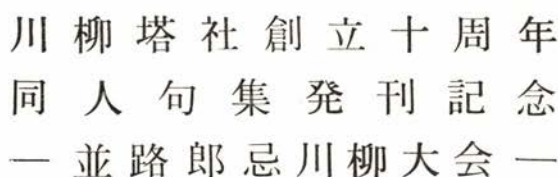
大阪市 高山 みどり

肩借りて歩けば春風後を押し
倉敷市 津田 耕水

高知市 竹崎 寛

倉敷市 津田 耕水

倉敷市 津田 耕水



(閉会後懇親宴・会費千円)



句の旅

同人特集

花の旅

花二題

岡村久志良

「おい、みんな、一泊どまりで寒霞溪へいこう」。半ドンの授業が終って、教員室が賑やかになった土曜日の午後、万年平教員をもつて自任する三席のH先生が言いだした。月給日ではあるし、たちまち衆議一決。にわか牛窓港から和船を仕立て花の小豆島へ向った。船が大部の浦あたり、播磨灘の荒波をものろに受ける難所へさしかかると案の定ひどい波、船頭までが青くなってしまう。命からがら土庄へ上陸、どつとばかりに角屋（すみや）へ繰り込み、女学生あがりという土地の若い芸者まであげて、小豆島小唄の稽古に励んだがみな落第。「おい、夜が明けたぞ」例

の三席氏に叩き起され、寒霞溪の南麓草壁までドライブ。当時（昭和四年）ケールがあるではなし、朝からアルコールが入ったのも居てガヤガヤ軽口を叩いて登る。普段着の詰襟という風采の上らぬ一行を、町から来たらしい紳士淑女達がじろじろ見るので、若い私は冷汗かいた。宿からつれて来た年増の仲居が「坊ちゃん、駄目じゃなあ、育ちのええのは、こんじゃでこまる」と、汗ばんだ手でぐんぐん引張って登るので、私は真赤になった。四望頂の桜の下へ陣取り、どんちゃん騒ぎがはじまった。

割勘で下戸は手ばかり叩かされ 久志良
酒よりも、踊りの方に少々自信があったので
花の下も踊ろうか踊ろうか 久志良

しかし、とうとう踊る勇氣もなく、牛窓港へ帰り着いたのは春の日長も暮れかかったころおい。ここでもまた何軒か梯子して魚のようになった三席氏を肩に、泣き出したくなつた頃には、校長以下同僚達の姿はなかった。

生酔いをつれて新任昏れ残る 久志良
黄昏の港町の乾いた道に、野郎ばかりがもつれ会った長い影がうすれて行った。

×

一九七二年初夏、訪米川柳観光団に加わり十五泊十六日、花好きの私は、8ミリのシネカメラを手に、アメリカ三界の花を追って、撮って撮って撮りまくろうという魂胆。ウエストサイド物語りのシカゴ、夢のナイアガラ、ビルの街ニューヨークと目の色を変えてカメラを振り廻し、隊列を離れたりますので団長に叱られ叱られビルの谷 久志良

そんな私を励ますように、同行のアサノカメラ社長K氏が「岡村さん、フィルムを惜しまないでじゃんちゃん撮りなさい。フジでもサクラでも、どんな田舎町にも売っているから」。私は安心して、トバクの街ラスベガスの不夜城、恐怖の大渓谷グランドキャニオン……と、憑かれたように撮りまくっているうち、遂に手持フィルムダウ。そして待望のバラの都ポートランドに着いたのである。その夜、ホテル・ヒースマンのロビーで、例のK氏が慰め顔で「心配しなさんな、カメラ屋のウインドに、フジの8ミリフィルムが並んでいた」さすがビジネスマン、もう商店街の偵察をやって来たのだ。一夜明ければ六月十日、私達今回の旅のハイライト、ポートランド市で六十四年間続いているというバラ祭りの圧巻、グランドフローラル・パレードを見るため、一行は八時に出発した。不運にも私はひどい下痢でホテルへ残ることになっ

た。ホテルの位置が繁華街ブロードウェイに面していたのでテレビカメラも来ているらしい。私はホテルの窓から、あのすばらしいパレードを撮影する肚をきめて、さて、肝心のフィルムを買うために、まだ少し痛む腹をおさえて街へ出た。ところがである。ここに思わぬハプニングが待ちうけていた。どのカメラ屋もみんな固く扉を閉じて、お祭のための臨時休店。それもその筈、病人でない限り、この街の人々はみんな毛布や椅子を持ち出して十時から始めるパレードを、今や遅しと待ち構えているのである。空っぽのカメラを投げ出して、地団駄踏んで口惜しが、今にも泣き出しそうな私の顔は、ルオールのピエロか。パレードへからのカメラを振りまわし

久志良

行くとところ花あり

国弘半休門

麦と兵隊は火野葦平先生の従軍記。花の旅は旅行添乗記と言うことになるかと思うが不肖にはそれ程の文筆も無いので只観たまま書いたままを書くことにする。

○大宰府の梅

へ東風吹かばにはいおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ
春を呼ぶ低気圧が本州の南岸沿いに進むと

福岡県は東風になる。菅原道実公を祭神とする大宰府天満宮は菅公の名声と共に梅の名所でもある。東風吹かばの歌は菅公と梅の結びつきを偲ぶに充分であるが九州の春一番と言えは何と言っても梅の花であるう。

梅香る茶屋から梅枝（うめがえ） 餅句う

半休門

○馬関女郎と花

へ寺院や毛布の上の花見膳 かうたる
平家の落ち人が花売娘になつて馬関に停泊してゐる船に紅石山の椿やつじを売つて生活した。ところが船員達は椿やつじには飽きて女性自身を所望するようになった。そこでサンパンの船頭これに答えて郭（くりや）を構えたのが公娼廃止になるまで股賑を極めた下関の女郎のはじまりだと言うことである。

女郎の姉さんが花魁で、下関市赤間宮の先帝祭は祭神安德帝の御陵に花魁になった平家の遺族が参拝したその道中を年中行事としたもので毎年四月二十三日が当てられる。寺院の句は花魁の首人形の軸画へ句首かうたる師が贅をしたもので先生のりくちよおが良くのっていて、面白いので花の季節に床に掛けて昔を偲ぶことにしている。

○紀州熊野と椿

神代の昔日本の国花は椿であった。椿は春咲くから木辺に春と書く。花のいのちは短くてと林美美女子女は詠んだが椿の花は二十日位咲いて、惜しいことには散りぎわが極めてあわいて、ポトリと地上に落ちた姿が打首に似ていると言うので武士に嫌われ、散り

際の良い桜の花を其後国花としたそうである。椿の葉に似た榊にも花が咲き実がなる。未だ紀州に椿の花の咲く頃旅行しないので紀州熊野の椿の花を知らないが神様に奉る榊は花を捧げるのでなく葉を奉るものらしい。

○アイヌとすずらん

すずらんや葉蔭に咲いて隠れがち 鬼城
すずらんをドイツでは五月の花、フランスでは五月一日をすずらんの日とし、日本の北の方では春の訪れ、花言葉では幸福が戻つて来たとして何れも祝福している。すずらんやの句は何となく淋しい感じがするので、句主村上鬼城師は北海道のすずらんを詠れたものだろう。北海道のすずらんは、半日を受けた湿地に咲く、アイヌ民族が大和民族に追われて行く姿にもとれる所にこの句の生命があるのではなからうか!!。

路郎先生は旅が好きで、先生の花の旅に、ふりつるべ花もさけなん音をたて
の句がある。先生の旅の句は実感の句だから難解とされるが旅の実感こそ旅をして知るのである。

月下美人

香川醉々

海舟ブームである。書店に行けば、海舟に関する本が平台・書棚に所狭しと並んでい

貧乏書生の我々仲間では、月下美人なんてまさに高嶺の花であり、見たこともなかったのである。ところで月下美人はその名の通り真夜中に咲く花である。

多分月下美人もびっくりしたことでしょう。お目々が覚めたときは、美人は、すでに咲き、すぐにしぼんで、あわれ邯鄲の一夜は終わりという次第。げに花より団子を地で行った、お粗末の一席。

町中に育った私が、土のある所に転宅して花との縁が深まった。タキイの雑誌や、入門書をたよりに、手当たり次第にいろいろなものを植えた。何年目かの五月、部屋中をバラの

香で埋めたこともあった。

白バラを摘む神様が欲しい朝

バラの虫私を鬼と思うなよ

一番失敗の少ないのは、チューリップ、ヒ

ヤシンス、水仙、フリージア、スノーフレ

ク等の球根類だった。

球根を植えて来る春疑わず

少女時代から晶子の歌が好きで、牡丹植え

君待つ家と金字して門に書きたる昼の夢か

な」にあやかりたくて、牡丹を植えた。

牡丹植え晶子の昼の夢を見る

に始まった牡丹作りは、仲々難しかった。出

入りの植木屋さんが「奥さん、牡丹は直根で

すよ。この土地は下がコンクリート、割らな

いで土を盛っても排水は悪いし、到底無理で

すよ」と言うので意地になり、「花が咲いた

ら私の勝よ」と暗けをした一幕もあった。

緋牡丹は炎の女かも知れぬ

一分間の柳論

川柳は人間陶冶の詩である。いのちある句を作れ。と麻生路郎師は私達に警鐘を乱打されて、川柳に一生を捧げられた。誠に有難い尊いことである。

ところが現代川柳を支持し共鳴している私達に一休禅師の句を川柳と言う人が何人居るか！教科書でも狂句として別格に扱われてある。もし路郎先生がこれは凡人が作ったから川柳これは禅の詩だから川柳でないとされる

男には見せまじ牡丹散るさまは

余生など牡丹は知らぬいさぎよさ

菊も少しやってみたが、毎日の手入れが出

来なくて、遂に棒を折ってしまった。

菊活けてひととき慈を忘れたり 白柳

手作りの大輪でこの境地に至る日は、いつのことになるのだろうか。

暗がりに梅の香と知る始発駅 栗

梅の花は、百花にさきがけて春を告げる。まだ肌寒い早春に一輪の梅花が馥郁と香っ

て、遠い万葉の昔の風雅をしのばせてくれる。

鬼貫の「独言」にもある窓よりこぼれ入る

梅の木が欲しくてならなかった。今年、やっ

と念願かない、窓からよく見える位置に寒紅

梅を植えた。過日、早朝の枕辺にうぐいすの

声を聞いた。スワ、梅に鶯と飛び起ると、隣

の二階の窓にとりかが吊され、御機嫌なう

ぐいすがいた。早とちりもいいところである。

国弘半休門

なら何も一生を川柳のために捧げられる必要はない。私達も亦何時かは川柳を卒業して禅か神かに入門したい所である。

年々歳々似たような川柳を作って牛歩を続けていく私ではあるが私は宗教で云う大乘の境地に生きる人間になりたい。そして、そこでも川柳の句を作りたい。

それが先生!!……川柳……半休門

椿落つ思いを断てと云うごとく

京都、銀閣寺の椿の生垣、詩仙堂の丈山遺

愛のワビスケ、比叡山の虚子の墓をとりまき

椿……と思ひ出をまさぐる。椿は、花弁とオ

シベが一つに連なっていて、花びらが一枚一

枚と地に落ちない。その上、花冠は重心の加

減で上向きに落ちるらしい。落ち椿の余情

は、大自然の恵みかも知れぬ。今やと二十

センチばかりの卜伴を大切にしているが、こ

れが大きき育って花を一ぱいつける頃、私の

いのちがあるのかな——と、ひそかに思う。

去年、大先輩から尾瀬の絵はぎきを頂い

た。今年こそはと思ひ乍ら、未だに実現出来

ず尾瀬はあこがれの地である。どうしても、

あの水芭蕉を、この眼でみたいと思ってい

る。

湿原はるか魂の吹き出たように水芭蕉

水客

花と言えば桜、花便りが聞かれる頃、日本中の花の名所は人の山になる。ほのぼのと咲く山桜の遠景も、夜桜の有情も捨て難い。しかし、つい喧嘩する雰囲気を感じて、その期を失うことになる。従って、五本ばかりあるわが家の桜を楽しむことになってしまう。ゆく春を惜む花吹雪の風情はいいもの、はらはらと散る美しさの中に哀愁がある。去年、京都、泉湧寺への道の花吹雪はすばらしかった。昔から桜をめぐる和歌、俳句、川柳の名句は数限りないのだが、所詮、私は俗物、古い実感句でしめくくることにした。花があり月あり禁酒のびにのび

濠・新西蘭への旅

48・11・15—25

井上湧三

情報過多しばしば免れて旅に出る

カンタス航空機上

富士あとに雲表を航く旅ふたり
ピンセットでタオルを配るお国振り
尿散華知らぬは下界ばかりなり

シドニー近く(濠)

一またき南半球は初夏の候
よう来たと南半球の十字星

シドニー

人間魚雷、心胆寒く伝わりぬ
人間魚雷、三十年を経た海模様

(オペラハウス)

館城幾何学的な影おとし
天外の奇想これなる館城

(動物園で)

ズウに来てやつとコアラにお目文字
春眠を貪るようコアラいる

カンガル―過保護のママねお前さん
ジャン製コアラを描いた紙バッグ

(ジャカラダー南国の花)

婉然と万葉紫 誰を待つ

街風情 奢らぬドレス、ワンピース

この彩を乞ふパール買わされる
バイキング肩擦れ合うてハウアユ―

夜の色に染まぬ旅空惹なく

モニングコール風うに起きてるお齡かな

(空港で)

万歳をさせてポケットまで探り
ガイガーをかざしレディも見逃さず

メルボルン(濠)

開国史、英から移すクック邸
倒しまに廻る日時計蟬時雨

ローンボール老いを養い長閑なる

クライストチャーチ(新西蘭)

奈良京都洋風化すりゃこんな街

(ウィルスト)

血腥 山積みされたラムスキ―

(空港)

南極へ四時間地球小さ過ぎ

(マウントクック山岳飛行)

橋つけたプロペラ機へわが生命

托生機いつ落ちようが七十五

舞い降りりや未踏の雪に靴とられ

雪原へ翼を休めて放尿す

雪の原、黄に凹ませた尿のあと

タスマン氷河、希求浄土に來た思い

表情のない氷壁へ対面す

氷河不易、どうにも動く気色なし

ロトルア(新西蘭)(間歇泉)

地の精の感情激し湧く如し

坊主地獄ここにも地殻異変劇

日本ならジャンジャン稼ぐ家が建ち

日本なら忽ち遊里となるところ

湯場風景違ふものかなお国柄

年輪の粗さ巨木の謎語る

(マオリ族部落)

発想怪奇マリオの木彫笑えまい

(アクロドーム)

へアカット、スードの羊 恋も褪め
ワイトモ鐘乳洞

洞内は星降る如く虫妖し

妖精よ惑わす勿れ土ホタル

北島縦走(新西蘭)

線散らす如く絵になり羊いる

ボスもいず示威にもならず羊群る

落日へ牧羊犬が吠えている

シーブドックどこ迄追うていったやら

緑食牛半幾千頭か風物詩

放牧へ牛の自由はどんなもの

オークランド(新西蘭)

港良しひとでのような陸の町

夏姿その街角にサンタ佇つ

乗り遅れホテル泊りも一興な

異国空、次便を待つて朝を発つ

結び

夫唱婦随、明治所産の旅やよし

自然多彩、吾が人生も彩が欲し

西方見聞記

大路美幸

▼二月八日(金)二十二時三十分東京発

「欧州ファッションの旅」九十余名は、ロ

ンドン、パリ、ローマへの期待に胸もカバ

ンもふくらませて、東京空港よりジャンボジ

奇術と私

村田瓢太

奇術も恋と同じで国境を超えた人種の別を問わない老若男女にもその現象が容易に理解でき、その不思議さが大きな魅力となり近年その愛好者が急激にふえて来た。その一因は国民の間にレジャーが定着したことにもよるが最も大きな原因は何と言ってもテレビの普及によるものと思う。これまで特定人（プロ）が一定の場所ではしか演じなかったものが茶の間に入り込むようになってから興味を覚えた素人がわれもわれもと習いだしたからに外ならない。

いま全国に公称五〇万といわれる素人の奇術愛好者がおり米国につぐ世界第二の奇術愛好国である。そもそも奇術の創始は人類発生時に遡るが勿論今のようなスタイルのものでない事は当然である。また魔術、幻術、妖術などといわれ専ら人を欺くのが主眼であったらしい。わが国への伝来は仏教の伝来時に僧によって持込まれ人集めの手段に用いられた。またキリシタンの流布とともに伝教師などによって広められた。やはりこれも人集め

の方法として使われたようである。

興行としては江戸時代に小屋掛けで始めて現れたが今日のものから見れば幼稚なものであったことは想像に難くない。明治に入り外来文化の波がドツと押し寄せる時期、奇術も例外ではなく、新しいスタイルのものが次々と取り入れられた。

わが国の奇術発展について忘れてはならない人に初代松旭齋天勝がある。大正年間その最盛時には二百余名の座員を引きつれて国内は申すに及ばず、海外巡業により天勝の名を世界に轟かせたことは既に周知の通りであり、当時としては斬新な今日で言うレビュ形式を奇術にとり入れて観客の目を楽しませてくれたことも今は昔らしい思い出である。またこの人は大へんな美人であり豊満な姿態を舞台衣裳につつま、華やかなライトを浴びて舞台上に現れただけで観客を夢幻の世界に誘いこみ、うっとりさせたものだったが惜しくも昭和二十年六十才で食道癌のためこの世を

ご投句に
レターに

川柳塔柳箋

送 価
七〇円
七〇円

去られた。

奇術を大別して純日本的なものを和装という。たとえば水芸や金魚釣り、胡蝶の戯れ、独楽芸などがあるが今はこうしたものを作る人が殆んど居なくなつた。と言うのが奇術だ

四月新学期

会 員 募 集

毎週水曜日 月四回

よる6時30分—8時30分

六九月で初等科修了

(規則書無料送る)

大阪市南区大宝寺中之町一
丁目542 誓得寺内

関西奇術教室

けでは興行がなり立たず寄席で漫才や落語などの間にいるものとして十分乃至十五分の僅かな時間しか与えられていないのが現況だからであらう。

稽古ことのすべてに言えることであるが我流はあくまで我流であり、やはり本格的に習わねばものにはならぬ。特に奇術のように微妙な動き、間のとり方など演出次第で出来、不出来のきまる芸事は尚更である。よく聞くことであるが「私のような不器用な者は奇術に向かぬだろう」と勝手に卑下しておられる人があるが決してそんなに卑下することはない。誰にでも容易に出来まふと敢えて断言したい。奇術にはたくさん種類があるがプロもアマもやることに変わりはない、結局のところそれを如何に演ずるかが決め手であり、つまりそれは熟練度の差である。

私が奇術を始めたのは二十年程昔になるが会合の席などで指名されても音痴の私には歌

は全く駄目、何かかさのあるものでやりばえ
 のあるものはないかと考えた末奇術を選ん
 だ。その当時は今程愛好者も多くはなく、い
 ろんな席でかなり珍重がられたようであつ
 た。後にゼンジ―中村師について手ほどきを
 うけて今日に到っている。八年以前に門弟達
 が相寄り南のお寺を借りて初心者養成の奇術
 室を開設した。毎年秋には発表会を催し会員
 諸君の一年間の研究の成果を公開している。
 過去二十年の間にテレビを始めいろんな会
 合の席で演技した回数はいくつもの数にのぼり
 心臓だけは強くなったがその割に演技の方は

あまり上達していない。今でも時々失敗をす
 る。鳩が勝手に先に飛び出したり、バネが故
 障して振出し旗が旨く開かなかったり、その
 場に臨んで道具の不足に気づいたりすること
 は往々にしてある。あるときなどはさて出演
 の直前になってとめ金に使う釘が紛れこんで
 判らず時間もなく会場の女性にヘア―ピンを
 借りて間に合せたことなどもあった。
 昔は手品師と言えば一段下の人間のような
 目で見られたときもあつたらしいが今は高尚
 な趣味として時代の脚光を浴び、インテリ―
 や女性の方にも大いにもてている、あなたも

一度習ってはいかがですか。
 ニッコリと出て来た美女にホッとする
 得心をさせて煙にまく奇術
 客席は金魚奇術の池となる
 奇術まで上手になって嫁きおくれ
 失敗と見せて奇術の名演技
 たね全部見えて楽しみ子の手品
 天勝に酔いし幼き日の記憶
 前出の句は本誌昭和四十六年十月号一路集
 で私の選をした兼題「奇術」に寄せられた入
 選句の中から再掲させて頂いた。

近 作

今治市 月 原 宵 明

白い字でガラスたしかにある硝子

コンピュータ―会社の癌をつきとめる

ささやかな買溜め入試の子の油

ファッションショー表情もなく折返し

大洲市 米 沢 曉 明

酒ぐせに馴れて上手に寝かす妻

隙間風無言の二人を通り抜け

大道具揃えた程の芸でなし

人情のあつい音です水車

岐阜県 市 川 鱗 魚

年がいも無いと金にけつまずき

いさぎよう引けばしんぼの無い批判

汗を出す稼ぎ笑って爪を染め

応接間名画の裸婦と待ちあぐみ

東京都 池 口 吞 歩

狂ってまんなあゲリラも日本人

狂ってまんなあ商社の儲け高

狂ってまんなあゴネ徳の顔ばかり

狂ってまんなあ保守も革新も

今治市 長 野 文 庫

お一人に一個と馬鹿にされながら

騙す気で行った田舎も値上げ済み

胸算をしてハイヤーをやり過ごし

税務署を騙すつもりの無性髭

花ひらく・第21回

大萬川柳大会

午 2 月 24 日
後 一 時

— 会 場 割 烹 大 萬



新築落成の大萬の前で
好郎氏（左）と松江克美氏

阿倍野区松崎町三丁目の新威容、割烹大萬が洋風三階建てとなり、まず目を惹く。

会場へはいと、下足預かり役をしているのが社長さんや部長さんという好郎門下の方々、これには恐縮してしまつた。

真新しい階段を上がれば、そこに受け付けがあつて、昨年まではそこが会場だったが新築成つた今日、会場はもう一階上になつてゐる。

木の香が匂う各室の新鮮さ、大小の和室、瀟洒な洋室がそれぞれの個性美を見せ、

「ほう——」と、吐息まじりの感嘆の声がここかしこに起くる。

「えらい二代目やなあ」

三階大広間の正面に生々庵主幹の横額、可愛らしい目になつて来た酔うているや、二階受け付けの

「生き甲斐は男同士が信じ合ひ」の墨の色も華麗である。新築祝いに贈られ

たとか、紙の白があざやかに部屋を明かるくする。そんな雰開気の中で開会の時間がせまる。ベストテンのうち6氏が女性群というのも大萬川柳の特長であらう。

司 会

開会の辞

柳 話

挨拶

謝 辞

兼 題

四十八年度ベストテン表彰

「新 築」

「繁 昌」

「親ゆずり」

「負けん気」

「達 筆」

「箸 枕」

「万 歳」

西田 柳宏子

若 本 多久志

中 島 生々庵

川 村 好 郎

松 江 克 美

藤 岡 花梢選

小 野 克枝選

宮 西 弥生選

藤 井 一二三選

飛 田 好一選

谷 垣 史好選

金 井 文秋選

菊 沢 小松園

閉会の辞
ベストテン招待懇親宴
このプログラムによって会が進められる。祝

電一葉、薫風、春巢、里風、可動、葉子諸氏が寄せられた。

中央に生々庵主幹の横額、その右横に故松江梅里氏の遺影、場内左右には例の梅里氏の短冊の屏風。出席者は廊下までハミ出す七十名という盛会である。

若本多久志氏は「梅里さんの逝去される数日前旅行して、旅館で歌をうたってもらつたが、疲かれてゐるのにムリに頼んだのが死を早めたのではないだろうか。ときどきこんなことを思う日がある」と。

生々庵主幹は「人間の幸福というものを梅里さんは身をもつてわれわれに教えてくれました」

松江克美氏は「この新築に一番苦しんだのは資材不足でした。おかげ様でやっと完成しましたが、つぎの目標は第二世梅里になるための川柳勉強です」

川村好郎大萬川柳選者は「毎月五百から七百の投句があり、それを無記名清記などで蔭

げの力をそいでくれているのが河内天笑、藤井一二三両氏である」と。

さて、48年度の梅里賞トロフィーを藤岡花梢さんが受け各賞の表彰がすむと、席題の披露になる。史好氏の「箸枕」がおわったとき好郎氏が「うまい」といみじくも声を出され、まな弟子の名選ぶりに心からの拍手を送くれたのが印象的だった。

梅里氏の包丁ではなく川柳のお弟子さん万里氏が「達筆」の天位。二代目も入選三句の成績だった。

木村弥栄子さん（第二位）の欠席で、倉敷の小野克枝さん（第八位）が「繁昌」の選に立つと拍手が爆発する。この人と三井酔夢さ



大萬川柳の花・左から宮西弥生・藤岡花梢・三井酔夢（香川県）小野克枝（倉敷市）ベスト10の皆さん。

ん（香川県）はすっかり大萬川柳の大スターである。天位が同じ遠来の西山朝二氏だったのでもちよつと遠慮されたが、堂々の披露は立派だった。

句会がおわると、舞台が宴会場となる。お待ちかねの大萬ムードだ。階下の調理室から山海の珍味と酒、ビールが階段をのぼってくると、水を得た魚のように、飲む、歌う、踊るの三拍子が、町子姐さんの三味に乗る。

天笑氏の司会で、各氏の美声が入りかわり立ちかわり披露され、とくに村田瓢太氏、西田柳宏子氏の師弟コンビによる奇術から、小野克枝さんの「黒田節」。三井酔夢さんの日舞は名取りの腕前。菊子姐さんも特別出演の「春雨」を舞って春をまねく。

高鷲亜鈍氏が起って余興のかわりに懐古談を一席。梅里氏は川柳を作りながら家を興されたが、私は詩と川柳を作っているうちに会社を一つつぶしてしまった。と、心あたたまるよいお話だった。

そして、なおも唄と踊りがつづく中を記者は朝二氏と克枝さんを新大阪駅へ送るため中座する。外は雨だった。心地よい冷気がほてった頬をなでてくれ、松崎町界わいのホテルの灯が雨情の中に美しい。

（ペン・不二田一三夫・カメラ・板尾岳人）

三才と軸吟

兼題「新築」

藤岡花梢選

新築はどの窓からも陽が入る

新築をはめて帰ってから無口

新築が一軒旗日の旗を出し

形水

好郎

牧人

新築の割り当てがくる祝い品

兼題「繁昌」

小野克枝選

繁昌に騙る心のネジを巻く
評判のすし屋で坐る椅子がない
下ばかり見て繁昌の靴みがき
内職が繁昌してる子沢山

兼題「親ゆずり」

宮西弥生選

父知らぬ遺児の仕草が父に似る
実印を肌身はなさない親ゆずり
親ゆずりと言われたくない親ゆずり
遊ぶことと親ゆずりと悔いていず

兼題「負けん気」

藤井一二三選

負けん気の記者鉛筆を尖らせる
負けん気が小粒のダイヤ光らせる
遺言にまで負けん気をちらつかせ
さりげないお世辞負けん気覗かせる

兼題「達筆」

飛田好一選

達筆もめでたい事に筆弾む
達筆の最後遺品という哀れ
達筆へ人柄のせた筆の跡
達筆な字が看板の書道塾

兼題「箸枕」

谷垣史好選

箸枕くらしのゆとり見せられる
箸枕日本はうまいものの国
働いて飲むには小さい箸枕
早よ去んではいい客にも箸枕

兼題「万歳」

金井文秋選

万歳へ日本人の血が躍る
万歳の声まだ耳にもう離別
当確の万歳壇を切ったよう
汐時を見て万歳でけりをつけ

柳宏子
儀一
幸太郎

静馬

朝二

朝二

静歩

柳宏子

克枝

つき子

天笑

喜風

柳里

万里

小松園

十止庵

柳志

居 眠 り

加藤貞山選

居眠りを日課に出来る嫁といふ
法話今佳境居眠り又佳境
居眠りが覚めて棚の荷確かめる
居眠りをしつつ聞いている妻の愚痴
居眠っていてもにらみのきく社長
酒が出る頃に居眠り目を覚し
居眠っている間にチャンス通り過ぎ
居眠りが起きて笑いの渦になり
居眠りが出来る身分をうらやまれ
寝台車座席になつてもまだ眠り
居眠りも悪口だけは聞いていた
居眠りのボウズで大物聞いてくれ
番台の居眠り勿体なしと観る
居眠りの聞くとはなしにきく秘密
翁媼の居眠り若き日に遊び
的外れの返事居眠りから返えり
居眠りが何を夢見るうす笑い
肝心なことは居眠り聞いて居り
居眠りは子のハンドルを信じきり
居眠りの夢も子のこと妻のこと
夕食の半で居眠るやんちやつ子
居眠りへ紙綴がそつと忍び寄り
うとうとと母の疲れがゆるむお湯
居眠りの首に黒子を発見し
居眠って環状線を一廻り

道風 一松 七面 魚山 洋々 同 芳子 季贊 曉風 不眠 二つ 同 登美也 どんたく 好亭 露杖 みどり 康博 章雅 軒太 可住 一郎 香珠夫

居眠りも許さぬ空港基地に住み
居眠りに帰省の汽車の音楽し
新婚の居眠りだから冷やかされ
居眠りの妻生活に疲れ切る
居眠りから覚めたら物偏上つてた
気にかかる居眠り電話のそばに居り
居眠りも母は処世の中に入れ
居眠りをする程家に馴れて嫁
居眠りのいびき会議をなごませる
居眠りはさぐぬユウモア交せて説き
乗り越しているとも知らずまた眠り
居眠りを越して廻る終電車
やけくその居眠りだとは人は見ず
居眠りへ掛けた羽織があたたかい
居眠りも拍手で覚めて拍手する
居眠り母極楽に遊ぶがらし
居眠りを起し合つて定時制
居眠り

春日 越子 本蔭 祥月 素身 紫宏 思月 千草 静泉 豊生 翠子 隆子 梁水 重人 肖心 綾女 凡九郎 無人 千里 千翁 古方 木魚 豊生 風

抜 け 道

永藤弥平選

抜け道を考えているサングラス
抜け道を造つてやったにまだ迷い
計画は法すれすれを渡る橋
抜け道のある勝算の早寝する
抜け道も考慮労使が席に着き
抜け道があった筈だと迷込み
二次会へ下戸抜け道を考える
抜け道があつて人生やり直し
抜け道を自分で塞ぐへボ将棋
案内書抜け道迄は書いて無し
若さあり抜け道などに目も呉れず
抜け道を教え先輩卒業し
抜け道を通つて来たと思の智恵
落城の秘話も抜け道秘めて朽ち
抜け道をもっともらしく聞いてやり
そんな抜け道があるとも知らず勝負に出
抜け道も知らず追手のまっしぐら
当り前やがたと抜け道のためらわず
抜け道やなんて生きて行くのがやつと
抜け道を二つ三つは持つゆとり
抜け道を知つて答弁よく喋り
抜け道を知らずに水をあけられる
抜け道を通れば只今工事中
抜け道のない人生の下り坂
抜け道を選んでしまった日の誤算

宵明 伸志 曉明 里風 茶人 良二 正彰 越子 松人 花郎 一郎 不二 洋々 芳子 七面 春日 古方 凡九郎 本蔭 祥月 素身 敏月 竹馬

抜け道をあけて夫婦で子をさとし
 抜け道もなくて茨の花に酔い
 抜け道も心得セールス如才なし
 抜け道も心でセールス如才なし
 ぬけ目ない抜け道どこかぬけていた
 抜け道の一つ値下げという商法
 窮すれば通じる抜け道見付出し
 抜け道は女涙をもち合せ
 抜け道の誤算構図が狂い出す
 佳

抜け道があつて夫婦の仲のよき
 実力のないのに細い道が抜け
 真すぐに生きて抜け道など知らず
 蟻ほどの抜け道天はこまかせず
 抜け道を通つた過去がある弱身
 抜け道をちよつと匂わす小役人
 酷評へ抜け道の無い芸磨く
 抜け道を知らぬ誇りの汗を拭く
 軸

抜け道を通り舞子の風呂帰り

幕

三井酔夢選

敬遠の幕を引かれてる明治
 幔幕のこころはぼろを隠すとも
 あつけない幕切れ遺影笑うたま
 うやむやのままで会議は幕を閉じ
 宵明
 可住
 雅章

幕あいを借りて選挙の顔を売る
 家計簿は赤だが今日の幕を閉ず
 幕合いの長さ飲んでる村芝居
 六方の気合い揚げ幕迄続き
 切腹をしても幕切れまでは持ち
 幕下でやめて始めた小料理屋
 度胸まだ決まらぬ中に幕があき
 ひよっこりと母幕切れになる口論
 芸の虫この一ト幕に命賭け
 幕張つてないしよないしよしたもの
 幔幕に自分の賽を握られさ
 出る幕じやないが俠気が承知せず
 晩の大気へ今日の幕あがる
 黒幕が背後でおどる物価高
 定年の喝采もなく幕が下り
 幕のない夫婦心をあけはなつ
 出る幕がなくボンヤリとテレビ見る
 名作は余韻残して幕を閉じ
 幕合いの見合い横目でみてとり
 幕切れを忠信狐空に舞い
 内幕はやつと高利で持つのれん
 定年へまだまだ幕はおろされず
 貸す金はないと煙幕張つて置き
 七人の敵と戦う幕があき
 幕がないので猿芝居まだつづき
 出る幕のない末席が一人酌み
 神主の年季は幕のくぐりよう
 色褪せた幕に家系の重み知る
 喝采を吞み込むうちに幕降りる
 人生の幕合い左遷をかみしめる
 呆気ない幕切れ離婚の印を押す
 軒太
 里風
 松花
 国彦
 バット
 七面山
 芳子
 春日
 古方
 凡九郎
 本蔭棒
 白水
 登美也
 牧人
 祥月
 素身郎
 紫宏
 カズエ
 どんたく
 竹馬
 木魚
 悠泉
 千代香
 千翁
 好一
 豊生
 奇童
 露杖

幕間いのない人生だ焦るまい
 幕切れを見ずにアベック席を立ち
 佳
 幕切れて別々に立つ風寒し
 幕はねてさつき切られたのも並び
 もう幕にしるしと幹事に耳打ちし
 人生の幕降り叙勲の沙汰が来る
 紅白の幕が祭りの街にする
 人
 入幕を果して童顔消えている
 与根一
 今日もまたピエロで踊る幕が開き
 梁水
 天
 黒幕の操る糸で木偶となる
 牧人
 ハイネの詩送り女の幕があく
 軸

むらくも二十五周年記念

観桜川柳大会 (島根県)

日時 四月七日午前十時
 会場 木次町民体育館二階和室
 兼 題 各題三句

「新開」 正本 水客 選
 「大慢」 西い わを 選
 「我慢」 木村 三雷波 選
 「善行」 尼 緑之助 選
 「料理」 津川 紫吻 選
 「実家」 森 冬 樹 選
 主 催 島根県大原郡木次町新市中
 むらくも川柳会 (藤井明朗方)

初歩教室

題「笑」

本田恵二朗

川柳の流れに静と動とがあると私は思っている。静は本来の川柳の姿で、時代の流れに沿って、近代的感觉で泳ぎ続けているのを意味し、動はそれにあき足らず、激流となつて岸を削り、流れの中を広げてゆこうとするのを意味したつもりである。そのどちらも有意義なことであり、共に川柳進展に不可欠なことであるが、動の場合、ともするとオーバーなゼスチュアになつたり、オーバーなフィクションになつたりして、川柳の域を逸脱することがある。所謂難解句をものして悦に入つたり、優れた文学であると思ひ込んだりのナンセンスが生じてくる。心すべきことだと思ふ私である。

自分をつめていたらいつしか笑う

凡九郎

噛み殺す笑いこんなにもつらい

同

笑いつきつめてみて答えられない笑ひ

同

(笑というものをよく掘りさげている佳句)

誓二

(笑い声乗せ合う長い電話口)

過去問えば女笑いをひつ込める
裏切りを許しておった父の笑み
(裏切りを笑顔で許す父の愛)

伊津志

温い笑いを秘めている眸

同

下心あるのか笑って逆らわず

無人

子の笑顔鏡の私も笑っている

慶彦

怒鳴つても応えぬ妻に笑い出し

同

(怒鳴つても怒鳴つても消せぬ妻の笑顔)

同

辞書笑うあんたそれでも大卒か

サヨ

無事暮れて楽しい夕飯の笑声

奴風

(今日も無事夕飯の卓に湧く笑い)

同

笑い顔がよい娘だと仲人言ひ

右近

(笑顔好しだつせと仲人如才なし)

同

因習を笑ひとばした幼な妻

香歩利

鉢合せ涙流して笑いあい

同

お愛想の笑ひもてたと鼻の下

宗義

(鼻の下愛想笑ひへ伸び縮み)

同

あどけない笑顔に姑の角が取れ

利美

(あどけない笑顔に姑の角を取り)

同

顔中を口にして笑つてみたい

同

苦笑いお面一本子に取られ

同

(お面一本子にしてやられ苦笑い)

同

釣銭に笑顔添えてまたどうぞ

同

(釣銭に笑顔を添えてまたどうぞ)

同

弔問へ笑い上戸をやつて悔い

本蔭樺

逆境にいても微笑み忘れない

同

初孫が欠伸をしたぞ笑つたぞ

貞祐

老いむなし笑ひの振幅小さくなる

同

泣かすより笑わす方がむづかしい

同

大笑いすれば虫歯へ冬の風

同

表面は笑つてはるが底知れず
一杯がはいれば笑い顔となり
(三本目ごろから笑い顔が出る)

同 三十四

顔出せばピタリと止んだ笑い声

同 翁童

やんわりと笑顔で左遷を告げられる

同 露杖

笑い上戸法事の酒に笑いこけ

同 紫宏

笑わせておいてこま売つて去に

同 寛

子の笑顔臉に浮べ土産撰る

同 同

人間の笑ひが猿の目に不思議

同 同

無理しなやしなやと笑い合うも齡

同 同

つくりなない微笑み惚れ惚れと見つめ

同 同

談笑のうちにつけ込む隙を読む

同 同

おこつてない証拠に一寸笑つとき

同 同

(おこつてない証拠に一寸笑くばに言わせ)

同 同

涙して笑う女で肥えている

同 同

嘲笑をうけた愚作と対話する

同 同

じれったい含み笑いで謎もかけ

同 同

(謎めいた含み笑いにじらされる)

同 同

破顔一笑とび込む隙を見つけた

同 同

食欲の少し出て来た目が笑う

同 同

ごまかしの笑い乾いた音をたて

同 同

給料日笑顔を作る古女房

同 同

(給料日だけは笑顔をつくる妻)

同 同

一年を笑つて過せ長寿を

同 同

(長生きをするぞ年中笑つてる)

同 同

孫抱いて笑つて見せるよい姑

同 同

(孫だけに見せる笑顔を持つ姑)

同 同

あどけない孫の笑顔に愛想し

同 同

(あどけない孫の笑顔に釣り込まれ)

同 同

朗か一家隣りが貰い笑いする

同 同

繁子

同 同

十八娘おかしくなくも笑うばかり

(娘十八また笑いまた笑い)

若さ一杯笑の音がこたまする

(はちきれる若さがくったくなく笑う)

笑わせてさてと切込む借り上手

ライバルの肩を叩いた泣き笑い

断絶のなかば折れてる苦笑い

時として恩讐の彼方にもある笑い

怒るより笑い中風でいて欲しい

笑い声聞えるドアを開いていて

(笑い声がこぼれるドアを開いている)

健康を丸出しにした大笑い

腹が満ち笑顔を見せる赤子あり

(乳房吸い飽きた子の笑みへ笑む)

ますえ

良二

同

かつみ

同

静観堂

静子

保夫

同

陽山

49年度 (第一回)

各地柳壇賞決定

若本多久志選

昨年四月号から「佳句地10選」を創設しました。各社ともに「各地柳壇」は孤島化しているようで、なかには全然読んでいない人もあります。句数まである程度制限して充実に図ってききましたが、はじめのころはなかなか協力してもらえず、規定無視の会は最後に組むという強硬手段をとるなどしました。大会その他の場合はある程度ワクを外して

インフレに笑みて儲ける便乗組

(インフレに便乗はくそ笑んでいる)

何事も笑いでます新世帯

三枚目笑わぬ顔で笑わせる

(三枚目怒った顔で笑わせる)

節約は美德だ古靴が笑う

笑うとき金歯をかくす手にダイヤ

遠き思い出に今も吹き出すこと一つ

同窓会笑いのうちに終りそう

(同窓会笑いの渦におぼれそう)

初孫の笑いへ一家渦をまく

(初孫の笑顔とり巻き春近し)

たちねの笑顔うれしく嫁迎え

たおやかに笑う女の悪魔めく

藤持

同

竹馬

同

濁水

同

つね

つた

同

同

比呂路

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

にやにやと聞かれ結局断わられ

合格日ボチは笑顔が作れない

(合格へボチは尻尾で笑ってる)

笑わせて素顔に戻る幕が降り

(笑わせた顔とは見えず茶屋の灯)

田舎から大声で笑う伯父が来た

(土の香と素朴な笑いさげてる)

よく笑いよく食い受験子寝てしまい

新入りのわからぬままに聞き笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

笑うより外に手が無いから笑い

同道子

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

大 萬 川 柳

「プラス」

入選発表

選者 川村好郎
 投句総数 六百五句
 入選 六十五句

大 阪 好 一
 マイナスを明日のプラスへチエックする
 神 戸 牧 人
 天分へプラス努力が実を結び
 富 田 林 花 梢
 初対面大阪弁がプラスした
 奈 良 保 夫
 いずれプラスになるやると特訓しこかれる
 豊 中 寿美子
 プラスでしたと一浪悔いていず
 倉 敷 梁 水
 六法書結局プラスにはならず
 米 子 千 代
 プラスにして見せませす波に逆らわず
 大 阪 雄 峯
 塩少し加えただけと母の味
 神 戸 静 泉
 プラスマイナスゼロ平凡な家庭です
 松 原 史 好
 失恋もプラスになった芸の巾
 今 治 宵 明
 美しい上にえくぼがプラスする

米 子 竹 馬
 道草もいつかプラスの人生賦
 広 島 と し
 公害へインフレまでもプラスされ
 島 取 保 子
 涙プラス嘘で女が武裝する
 岡 山 止 水
 プラスする経費をさがす決算書
 香 川 醉 夢
 子供までプラスアルファ出せこら
 富 田 林 弥栄子
 生きているだけでもプラスになる夫
 松 江 与根一
 給料プラス内職でまだ建たず
 大 洲 曉 明
 追伸は短か本音を吐くところ
 貝 塚 つき子
 整形にプラスアルファ賭けてみる
 倉 敷 里 風
 少しでもプラスになる夜のミシン
 大 田 軒太楼
 数字から見ればプラスとなる試算

島 取 豊 生
 育児日記明治の知恵も借りてくる
 岡 山 洋 之
 上役へプラスを期待する包み
 平 田 代仕男
 人の和がプラス社運を盛り返し
 大 阪 三十四
 ベアのプラスインフレに追いつけず
 大 阪 濁 水
 人生のプラスになったユックリズム
 奈 良 本蔭棒
 実力へプラス何かが要る入試
 八 尾 美 幸
 世の中のプラスになれと子と思う
 岡 山 宗 義
 どたん場でプラスに成った体当り
 東 大 阪 弥 生
 負けて勝つあとのプラスを見失う
 つまずいた愛のドラマがプラス
 大 阪 君 子
 愛の血をプラス命の灯を守る
 大 阪 一 栄
 七光りプラスしてるを気がつかず
 プラスした鼻の個性が見つからず
 松 原 重 人
 夫婦ですプラスマイナス溶け合つて
 又一つプラス逃がした日の誤算
 大 阪 柳宏子
 プラスばかり追うていびつな子に育て
 下積の苦勞がプラスされた芸

大 阪 十止庵
 いさかのプラス黒インキがおどる
 余生まだプラスとしたい鉄握る
 大 阪 文 秋
 長年の趣味がプラスになる余生
 燃えている間はプラスばかり見え
 プラスだけ心に抱いて寡婦で居る
 笠 岡 古 庵
 笑つても泣いてもプラスになる女
 ああ苦勞プラスだったと今わかり
 寝て暮す方がプラスよ日曜日
 寝屋川 小 路
 かざり気のなさをプラスにした見合い
 家計簿へプラスにならん春を播き
 商談はそれずプラスになった酒
 藤井寺 吸 江
 家計簿へプラスにならぬ娘の勤め
 反省をプラスに明日へ立ち向い
 プラスアルファそのアルファで夜が白み
 興 英 詩
 プラスにはならぬ話に出た欠伸
 弁解はよそうプラスにならぬから
 人生のプラスに聖書開く夜
 佳 句
 堺 天 笑
 一步引き下がるプラスを知っている
 米 子 竹 馬
 一病がプラスになって喜寿祝う
 倉 敷 梁 水
 心眼で見ればここにもあるプラス
 米 子 千 代

長い目で見ればプラスと気負けせず

愛プラス金 欲張りな縁を待ち

人ノ句

大阪 君子

プラスにもマイナスにもされ老母達者

地ノ句

富田林 花 梢

プラスになる親類だけを書く釣書

天ノ句

神戸 静 泉

プラスするはずの助言でこれ出し

菜の花 合同吟行句会

日 四月二十日・二十一日

所 湯郷温泉(みまさか荘)

TEL〇八六八七二〇四八八

出発時間 団体切符購入中につき

未定

会 費 約八千円

宮本武蔵の出生地宮本村を経て

川柳パスの作者白岩文衛氏を迎え

現地川柳家二十名程参加の合同句

会になります。二十一日は湯郷温

泉よりマイクロバスにて津山城跡

日本原高原レストハウスにて中食

の予定。

兼 題 宮・通・剣・巻物・箆る

締切人員 三十名

幹事 鬼遊・岳人

お申込はお早くどうぞ!!

選者 吟

諸手当がプラス所得税もプラス

昭和四十九年度ベストテン

(二月現在)

一 十止庵

二 花 梢

三 静 泉

四 梁 水

五 柳 宏子

六 つき子

七 本藤棒

一〇、〇 大阪

九、五 富田林

八、〇 神戸

六、五 倉敷

六、〇 大阪

五、五 貝塚

五、〇 大阪

八 吸 江

九 重 人

一〇 牧 人

一一 弥 生

一二 英 詩

一三 静 男

一四 代 仕

一五 里 風

一六 凡 九郎

一七 小 路

一八 古 庵

一九 栄

五、〇 藤井寺

五、〇 松 原

五、〇 神 戸

五、〇 東 大

四、五 興 塚

四、五 宝 塚

四、〇 平 田

四、〇 倉 敷

四、〇 大 阪

四、〇 寝屋川

四、〇 笠 岡

四、〇 大 阪

下村 梵 個人川柳詩

武 玉 川 第15・16集 合併号

豪華なる執筆陣。小島政二郎、阿達義雄、堀口大学、萩原井泉水、玉川一郎、堀口塊人、東野大八、藤山愛一郎ほか多彩な顔ぶれ。

▼東洋樹賞に輝く下村梵氏の「わが武玉川鑑賞」【川上三太郎】は定評あるもの。

▼今集にかぎり合併号につき四百円(送料とも)季刊(年四回)一

九年八百円(送料共)

〒950新潟市船江町一丁目六二

武玉川文芸社 下村 梵

投句先

〒593 堺市堀上緑町一の三七

藤井一二三 大萬川柳係

昭和四十九年度第五回

「馬 鹿」 五句以内

締切 四月二十日

第六回

「焦 り」 五句以内

締切 五月二十日

二〇 文 秋 四、〇 大 阪
二一 君 子 四、〇 大 阪

み

んなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック



積 水 化 学

本社 大阪市北区東淀町1

柳界展望

(原稿締切毎月末)

▼中島生々庵主幹の令息孝之氏(関西医科大学卒・同大学脳神経外科教室講師)は三月二十四日諏訪ノ森邸で華燭の典を挙げられた。▼増井不二也氏(神戸市)からのお便りによると、姉妹都市天津・神戸の友好の船に文化関係者20名に参加して四月天津へ十一日間行ってきました。▼富士野鞍馬先生から一昨年極月二十九日夜、突然猛烈な喘息発作、救急車で病院に運ばれ、正月も節分も病院で過ごし、ようやく立春すぎで二月九日退院しました。先生は八十歳。▼柳都48年度柳都同人賞は熊倉風車氏一びしよ雪にいはよい無色になる北よーほか。柳都会員賞はちば東北子一自動ドア企みのない風子氏を連れへはか。▼川柳をぬきき300号記念「北海道川柳大会」は七月七日午前十一時から小樽

市医師会館四階大ホールで開催。題「青・朝・越・砂・直・ほかに席題(各題二句)投句締切四月三十日投句料三百円(発表誌呈)投句先小樽市緑2丁目8番2号、北海道川柳大会事務局、米沢武。▼一九七四年版雄山閣編川柳年鑑発売中。▼川柳路社全国誌上大会「風刺吟・石原青竜刀選」自由吟・時美新子選「十四字詩・清水美江選」課題「栄えろ。五十嵐さかえ選」鼻・磯部鈴波選「育てる。柿沼考人選」時・三条東洋樹選「鉄・田中好啓選」各題三句。出句料五百円(全員に発表誌呈)締切四月三十日、詳細は左記へ。二五〇小田原市鴨宮三七二二、関水華方。▼愛媛川柳研究大会が五月十九日(日)午前十時から河野記念館(今治市旭町一丁目)で開催。題「終点」は「相槌・鐘・銀・席題二題、特別課題一題(各三句)会費五百円(軽食・発表誌呈)主催「汐風川柳社」藤村涼子さん(ニューヨーク市)のご子息篤志氏は良縁ととのい三月十一日東

京パレスホテルで華燭の典を挙げられた。

▽同人の動向△

▼若本多久志氏(西宮市)を川柳名人のテララ哲学と題して交通毎日新聞がインタビューした。尼崎日産自動車の会長として、その車談義は堂に入ったもの。一けいさいの友「の川柳漫談もいよいよ筆が冴える。▼浜田久米雄氏(岡山県)は吉永町合併二十周年記念式典が三月式場で久米雄氏は町の文化功労者として表彰された。昭和二十一年以来、川維備前支部、備前川柳社、吉永川柳社を通じての川柳の社会化に協力、精進をつづけられたものによる。▼八木摩太郎氏(堺市)の句碑が牧村史陽氏の郷土史大阪文学碑めぐり⑩に掲載された。また「堺市第一第二号」にも掲載。高知新聞社からは土佐十一烈士について二月二十八日来訪をうけ、高知方面にも堺妙国寺事件が報道される。▼菊沢小松國氏(大阪市)は天守閣四十周年記念句会に選者として出席。▼西尾榮氏(八尾市)も柳

宏子、酔々、鬼遊、幸生、美幸、雀踊子、真山、凡九郎、儀一諸氏と共に出席。なお大万川柳大会当日は湯涌温泉へライオンズの有志と湯の旅を満喫。白雲楼からい温泉の廊下大阪弁と又出あい一葉。▼橋高薫風氏(豊中市)は二月二十四日の柳都川柳社の白鳥を観る句会の選者として出席一葉の月瓢湖に映る力なし一葉の風。▼藤井明朗氏(島根県)から「むらくも川柳会も川柳塔同人が十二人になりました。正式な木次支部となりますね。と。▼兄島与呂志氏(大阪市)は三月一日から開催の市職員文化祭に市長賞、神田秀峰氏は大会委員長賞を共に得られた。なお与呂志氏の実兄が二月二十五日逝去、同二十七日告別式。謹悼。▼河股緑水氏(大阪市)住吉区庭井町一二〇文化住宅B十一に電話開通一電六九七・四四九三。▼小浜牧人氏(神戸市)から「一月二十五日に薫風さんの「肉眼」刊行記念を開き、和川柳研究会主催で開きました。故河相すゑ氏がこの席にいないのが残念。

▼本田恵二郎氏(倉敷市)から「縁の糸望み望まれ結ばれる」二月二十日大安吉日に末っ子が(公立高校教諭)が結婚。岡大名譽教授文博士秀一先生(本人の恩師)はじめ多数の先輩友人に祝福最良の一日でした。五月十二日には柳友伊丹阿喜良氏の長男の結婚の仲人役を岡山神社にて相勤めます。「お芽出度い役をメデタイのが勤め」と。▼岸南柳氏(大阪市)の住居番号変更一天王寺区北一丁目3番11号。▼山内静水氏(竹原市)から「房子はお蔭様で近く退院します。当地の河村守造氏の「お便り」の川柳塔で不二田一三夫氏の一文を拝見し大変懐しく、氏は標語界の重鎮で不二田調の標語は知る人ぞ知る」云々と。本誌購読をすすめています。▼大江秋月氏(姫路市)は二月の異動で三十九年八カ月勤めた国鉄を退社、駅長生活も三年生で七年間、どうやら大過なく肩の荷をのうりました。三月から自宅の近くの会社にとめられるとか。▼荻野鮫虎狼氏(岡山県)は二月の異動で新見機関区

新 同 人 紹 介

鈴木 生 仏

本間 満 津 子

山 本 窓 花

瀬 田 美 知

高 橋 夕 花

栗・智子・一三夫―推薦

森 田 カズエ

―春巢・笛生―推薦

武 津 柳 影

小松園・摩天郎―推薦

助役に榮転された。
▼景山綾美氏（島根県）は二月十日の異動から米子鉄道管理局人事課から山陰線玉造駅助役に就任。

▼越智一水氏（今治市）から二月十六・十七日松山で第74回四国郵政川柳大会開催。句会後文学散歩で楽しみました。

二氏とは新幹線も環状線も同じ車だったのに天王寺駅へ着くまで会わなかったとのこと。柳宏子氏が新大塚駅まで出迎え帰りは一三夫氏が同駅まで送った。

▼川口弘生氏（大阪市）から一新同人の本間満津子さんは全篇のためテップに吹きこみあとで筆写するといふ熱心な方であると。

▼不二田一三夫氏が三月に発表した新聞西新聞サンデー読切り小説「靈泉綺談」は、薬博市場没食子氏がかつて指導された川柳家で温泉旅館の支配人から取材したものであると。

▼木村千容氏（倉敷市・元同人）は二月八日、最初八歳のご高齢で逝去。最初中代男と号されたが路郎先生から改号を示唆され千容となる。警察署長―大原家の執事を勤められた。合掌。

▼高橋鬼焼氏（広島県）から祖母九十歳が一月十四日死去したため一月の投句を休み残念でした、と。

▼4月の句会▼

▼堺・若芽川柳合同句会・十三日午後六時から―題・

疲労回復・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠

☆食後すぐのものが効果的です

☆くわしくは医師や薬局・薬店で



タケダ

光・残る・叫ぶ・テスト・会場―八木摩天郎宅。
▼南海川柳会―十八日・題―伸び率―ときめき―とりこ。会場―南海電鉄本社食堂内。
▼南大阪川柳会―二十日午後六時から―題・うやむや・発起人・世相・虹―会場松崎町三丁目、大万。
▼川柳東大阪句会―二十七日午後六時から―題・分業・三代目・てれかくし・マイナス。会場―東大阪市中央公民館第二集会室。近鉄永和駅前南、市民会館。

本社 三 月 旬 会

会場 以和貴荘

八日 午後六時

今月も67名の盛会。太茂津氏や肖二氏のご努力で新しい方のご出席がふえていく。ありがたいことである。

葉氏の柳話は、四つの文字からなる一異越同舟、四面楚歌一などのエッセイだったが閉会が八時三十分なので「小ばなしその一」で終ったのは惜しい。進行の柳宏子氏も頭が痛い。

兼題「限界」の阿部柳太氏の欠席で戸田古方氏が代選された。

竹原の小島蘭幸氏が突然出席され、満場拍手をもって迎える。たけはら川柳会のホープだけに凄人人気だ。

大型新人として、だれもが買っている高橋敏子さん一火花と改号。(智子さんの親友で俳誌「早春」で活躍中)が8句入選のうち2句が天位、見事である。今月の月間賞杯は不二田一三夫氏。(八時三十分閉会にご協力ください)

(河井庸佑・整理)

出席―与呂志・正彰・三十四・一三夫・と進行・西田柳宏子

しよ・太茂津・武雄・多久志・柳志・文秋・香珠夫・花梢・形水・牧人・たかし・柳宏子・六竜子・一舟・千万子・鶴声・悦郎・飄太・静馬・三郎・古方・茂男・蘭幸・野迷路・肖二・綾女・好一・雪二・葛城・幸生・吸江・十止庵・痴亭・水京・維久子・敏・幸太郎・一二三・儀一・喜美子・葉・雀踊子・緑水・岳人・美幸・寿子・一世・静歩・メ女・酔々・弥生・鎮彦・小松園・南柳・柳信・敏子・素郎・庸佑・史好・生々庵・薫風・葉子

席題「怪物」

香川 酔々選

怪物クンに慶大の門狭すぎた 一三夫
怪物に意外に若い妻がいる 史好
ママと言う怪物今日は良く笑う 寿子
怪物のうどんが好きと見えぬ顔 小松園
怪物の語録ベストセラーになり 形水
大きくなりすぎて怪物死に絶える 武方
怪物の跡目へどんぐりかてごろ 古雄
怪物も突かれる急所持っており 幸太郎
怪物のテンポになってゆく候補 敏子
怪物の子に平凡なのが生まれ 三郎
怪物の出ない童話へ子のあくび 六竜子
怪物を詰めたつづらでも欲しい 香珠夫
古女房ふと怪物に見えてくる 緑水
怪物と言う肩書きのない名刺 庸佑
風邪にじらせて怪物うなっとり 美幸
花ありて酒あり怪物浮かれ出し 蘭幸
噂とうとう怪物物にしてしまい 静馬
怪物も女の涙にたわいなし

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 三四五二一四
夜間 06 四四〇八

席題「無職」

古川 鶴声選

怪物の素性を知っているマダム 形水
怪物が出て面白くなるマンガ 岳人
怪物と見えず飲んだら寝てしまい 静歩
紳士の面かぶり怪物夜を行く 敏子
怪物のたまご地熱であたためる 酔々
職探す人とは見えぬふところ手 静馬
太陽は無職となった日も昇り 幸生
女とは無職のほうが派手に生き 一三夫
無職にも太陽があり月がある 敏子
物価高それでも無職ある不思議 千万子
腕さすり不遇をかこつ日の無職 好一
悠々自適でしよう民生委員あてがわれ 吸江
年寄りに手頃な仕事ない焦り 静馬
今日からは無職となったビル仰ぐ 美幸
寡婦の城守り通して無職で居 舟
顔役とも書けず無職と届けとき

赤旗の影を無職が踏んでゐる 美幸
七十の意地は無職になり切れず 葛城
世の中は不満だらけの無職の身吸 江
無職とは言わずバタ屋と小さい声 儀一
喰うだけを稼ぎ無職という女 鶴声

席題「エネルギー」 高木幸太郎選

エネルギーの限界を知る上り坂 美幸
まだ老いぬ壯者を凌ぐエネルギー 肖二
顔ほどにエネルギッシュな男でなし 敏子
時節柄と小出しにしてゐるエネルギー 文秋
石油を持って世界を振り回し 弥久子
黒潮に生き抜く海女のエネルギー 花梢
未だ父にある青年のエネルギー 古方
エネルギーためるゆっくりにむやみ 弥生
エネルギッシュな男できれいに金を出し 一三夫
撲つ投げる敏江玲児のエネルギー 形水
秒単位で動く社長のエネルギー

一分間の柳論

「川柳とは何か」のなかで川柳を人間陶冶の詩である、つまり句はその人の心であり、十七音字はその人の姿であり、リズムはその人の呼吸である、こう恩師路郎先生は教えておられる。

わたしの作句アイデアはまことに平凡常識的なもので、自分の作意に嘘があつてはならない、そのものずばり素直に表現できてこそ真実の句であると心がけてゐる。しかし余りに飛躍しすぎた表現になると結果は読者に不

エネルギー彼女のためにとつてある 素郎
エネルギー残し半身不随なり 素郎
エネルギー少し残して後記書く 一三夫
エネルギー恋と仕事に使いわけ 敏子
エネルギーどこかで漏れてゐる日本 蘭幸
断崖にロープとゆれてゐるエネルギー 岳人
スポーツ紙読む青年のエネルギー 柳志
エネルギー貯めて閑かな休火山 柳志
エネルギー資源を持てば偉い国 幸太郎

兼題「限界」 戸田古方選

限界を超え四次元で遊ばんか 亜鈍
限界を晒したくない化粧する 柳信
限界がいともほんやりピンク色 弘生
限界線生きねばならぬ昆布採り 水車
欲ばけに退く限界がわからない 静馬
カムバック限界説が嘘のように 蘭幸
限界を知りしんがりをマイペース 一世

小林孤呂二

愉快を与え、悲哀を生じさせるような難解句になりがちである、最近には自分の句にさういうふうな句が目立ち、時には自分の句にさういふ疑問を持つことがあり、欠格人間が巷にはびこるやうに川柳にもその傾向を感じられるのが恐ろしいだからといってそれらを切捨ててはならない。作る川柳よりも対話の川柳こそ必要であると思われ、作句指導に当っておられる方々「良匠は材を捨てることなし」の名言こそ、尤もあてはまるようである。

限界の分らぬ余生だからよし 香珠夫
限界は無限のわくを持つており 鎮彦
限界がわからないから人間さ 一三夫
限界を知つてゐる心あたためる 雀飼子
限界を知つてゐるから煮え切らぬ 小松園
ギリギリで妥協と言う手もありあり 好一
アスファルト割った街路樹達ましく 正彰
こいらが限界欲をひっこめる 一三夫
スレスレに注いで立飲み喜ばせ 静馬
限界を知らぬ全身山男 岳人
友情の限界告げて帰る冷え 敏子
愛憎の限界夫婦水となり 敏子
体力も限界手切れ金もなし 素郎
限界は造花にいのち吹きこめず 滋雀
限界が狂うてシグナルうるたえる 悦郎
失敗を妻限界と笑うだけ 千万子
限界のないオールドパワーにも困り 形水
限界にないどむ毛穴も呼吸する 雀飼子
職場には限界があり趣味に生き 史好
限界を針の穴からおしえられ 花梢
ギリギリの線で理性をとり戻し 多志
限界は人の造つた影法師 幸生
つかみ取り両手の欲は知れたもの 滋雀
限界を越えて路傍の石となる 花梢
限界を覚つた父は童話読む 古方
限界に達してしばらく眩暈する 古方

兼題「スクープ」 金井文秋選

スクープへ西山記者の勇み足 水車
スクープのからだ恋に身を焦し 弘生
スクープへ弱い女をもてあそび 栄

生命がけでのスクープがおくら
スクープへ妻の気転が走らせる
目の色をかえたスクープまた不発
死にかけているにスクープ死なせない
スクープへ反発出来ず泣く女
スクープに焦り女の翼に落ち
出し抜いた優悦感で記者は生き
聞いた時スクープとまで気がつかず
スクープへ男と男昔を向ける
裏の裏見たスクープのにがい酒
特ダネに記者の涙が通う記事
スクープを追いつ追われつ週刊誌
キレギレのスクープ記者はつき合
屋根裏でねずみにもなる事件記者
悪人も射程に入れてスクープし
スクープのコネを色仕掛けで作る
責任のないスクープへ踊らされ
スクープになるまで大臣知らなんだ
結局は楽屋落ちした素破話
スクープへ我社の電話抜き
スクープがあると前置きして口説き
スクープへ滑りの悪いボールペン
特種ヘココースを変えた記者の勘
スクープにされてスターは売れはじめ
スクープあざやか内閣大あわて
スクープでずばり商社を切る啖呵
スクープヘデスクをじらす秒の針
スクープに命をかけただけは売れ
スクープへ燃やすファイトの無情なる
スクープだったとは読者がつかず
読み捨てられてる命がけのスクープ

亜 鉦 柳 信 富 子 肖 二 滋 雀 野 迷 路 岳 人 一 二 三 好 一 二 三 葛 城 鬼 遊 幸 太 郎 幸 女 静 馬 柳 宏 子 鶴 踊 子 柳 志 柳 志 吸 江 三 十 四 醉 々 武 雄 多 久 志 史 好 古 方

川柳塔社常任理事会（二月四日）
七月七日の十周年記念・句集刊
行・路郎忌川柳大会へ薫風大会委員
長は大わらわである。
四月号から印刷所を変えることに
なった。良くて早いところがあつたの
を一三夫氏から説明。これも誌代等
値上げの防波堤となつたわけだ。
句集原稿のまだの方はスグお送り
いただくよう某氏の弁である。
出席・柳志・多久志・文秋・榮・
生々庵・薫風・一三夫諸氏。
▽霞乃先生から主幹宛の一生駒だよ
りはスペースの都合で次号へ。

地獄耳今日も紙面を飾り立て
遺族泣く横でスクープ書き上げる
スクープのルバンク島はまだ静か
ポイントを選けてスクープへ迷うペン
スクープに他社のあわてる顔浮かぶ

兼題「掴む」 西田 柳宏子選

無意識に掴む突差の事故に耐え
平凡な暮しの中に掴む幸
八起きて掴んだ運は離さない
そこそこ春を掴んで試歩の杖
転んでも砂を掴んで起きる子よ
やつと恋掴む男で無口です
幸福を掴む手相で握るパパ
起重機のやけくそに似た驚掴み
もみじの手何でも掴む好奇心

三 郎 十 止 庵 幸 蘭 幸 太 茂 津 文 秋

梅田 一番地
楽しいショッピングとくするのす
いこいをくまに
百貨店

わし掴みする大金はドス黒い
幸運を掴んだ手だよ握手する
書き出しのヒント掴んでペン走る
天下手に掴む国盗り物語
ネクタイを掴む国盗り物語
過去捨てて女侍つかみとり
掴みあいすんで議員はまた眠り
不渡りを掴んで右往左往する
確証を掴んで税吏の白白し
掴み取りつかめば掴むほど抜けず
資金繰り薬をも掴む高い敷居
掴んだのは東の間汚職記事になり
倅せをやつと掴んだ披露宴
もう一人の俺が掴んだ貧乏神
掴まれたその手を逆に護身術
綿雲を掴みたくなるプロペラ機

鬼 遊 緑 水 一 三 夫 肖 二 儀 儀 維 久 子 静 馬 吸 江 静 馬 富 子 鶴 声 富 子 一 舟 小 松 園 幸 生

ショッピング・ゾーン

大坂梅田・水端定休
阪神
電話(06)345-1201(代)

板前が掴めば鰻の柔順な
本心を掴めば欲につき当り
背伸びすりや掴めたチャンスに悔残る
反応を掴んだらしい眉動く
立直りのチャンス掴む春がくる
スキヤンダル掴んだ記者の急ぎ足
離してみてわたし掴んでおりました
尻尾ふる掴みどころのない男
俸せを掴んでからの日が早い
スカ掴んだと夫婦とも思ひ
倅せを掴む女はよく笑いとし代
斬られ役虚空掴んできて煙草
カネ掴むところで醒めたあぶら汗
爪染めて何掴もうとする女
懸命に孫が掴んだ手の温くみ

雅号ぶつちやけばなし

(122)

ぶ
ん
こ



長 野 文 庫

な
が
の

ら生れた名前であります。
訳あつて、戦後店名を改称していますが、昭和二十
年まで屋号を「東洋文庫」と云っていました。姓は長
野、名は軍四郎ですが、誰もまともに名前を呼んでく
れる人は無く、もっぱら「おやじ、古本屋、文庫」な
どが通り名だったのです。
つまり、近所隣で通称愛称の「文庫さん」をそのま
ま雅名としているので、近頃文庫本の種類もふえ、何
々文庫と云う商号も多いので、雅名として相応しくな
いとも思ひながら使っています。

身長一五一、体重四五キロの小型で、而
も職業は古本屋、誰でも小型の文庫本を通
想するようですが、実はこの名前、商号か
ら生れた名前であります。

(職業・古本店・七十歳)

停年のあすから掴む杭がない
少年の指悲しくて石掴む
幸福を掴んだ化粧うすくなる
掴んだら虹が消えますシャボン玉
白惚れがしかと掴んだ貧乏くじ

兼題「洋酒」

大坂形水選

ジョニコロで酔い日本語で管を巻き
洋酒のむ娘の供して春の宵
日本酒と洋酒の中に酔いつぶれ
洋酒党右と左に別れたり
誕生日赤いお酒をふるまわれ
旅艸のませる人のある角瓶
水割が男ざらいを狂わせる
一滴がわたしを換えたブランドー

三郎 酔々 蘭幸 敏子 柳宏子
三郎 酔々 蘭幸 敏子 柳宏子
三郎 酔々 蘭幸 敏子 柳宏子

止り木でねばる水割りペレー帽
ブランドー妻は短い足を組み
ええ洋酒マネほど注いでうまいやろ
そんなとき洋酒を飲んでから眠る
とつときの洋酒へ恩顧目を細め
お土産の洋酒が羽田でひっかかり
縋り戻すワイングラスが燃えている
主治医に洋酒ならと言わせたり
カクテルで女きれいに酔うつもり
口切らぬ娘がずらりとホームバー
怪し気な洋酒を飲んで三三三
カクテルならと婆ちゃん椅子をよせ
ジョニ黒の封は切らないホームバー
狼が羊に飲ます赤い酒
ええほうの洋酒よばれた人違い
アプサンを呷りたいよな挫折感
殺意ふとブランドイに沈ませる
ウイスキー飲んでアイラブユーと口説き
リキニールに犯かすは今とささやかれ
足を取る洋酒と酔うてから判り
洋酒グラスをたおし作家病んでい
上段は飾り用です洋酒棚

×

▼和歌山放送局から「川柳しんぐう吟社」の
「みかん集」を紹介したいからとの電話があ
り、突然のことうろたえました。三月四日午
後一時三十分から約六分間、川柳談義と「み
かん」の入選句十五句と作者を紹介しました
が好評でした。昨年の壽吟行を思いうかべ川
柳の普及に少しでも役立ったことをよろこん
でおります。(新宮市・大矢十郎)



▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。書式は発表誌のように下三マスに雅号。

高知川柳社

川竹松風報

午前中着くはずの子を母案じ 喬秀
先生のスト午前中自習させマコ
午前中短かくなつた冬休み 甚吉
午前中来る集金に気が障り 紅雨
見学の兄に虎居眠りの昼下り 柳翠
表情のくずれぬ虎の母性愛 芽十
七草の健康祝う箸を持ち 寛
作られた笑顔心の奥が冷え 八重
元旦の笑顔のままで暮したい 美知
叱られて笑顔で舌出す反抗期 勝子
笑顔から笑顔へ賞与渡される 桃水
集金のマダム笑顔置いてゆき 春輝
さて幾つさばをよもうか誕生日 日女
雪ぐもり隣りも遅い朝の音 みつ子
子等の餌に喜び集うまな鶴よ窓 花
元旦の髭の青さや親と子と 望
生臭い焚火にあたる魚市場 其梅
親馬鹿が金の卵にしてしまい 星雨
口あけて笑える友へ気を許し 松風
川柳たけはら

森井蒨報

わかつていたつもりあまりに重き妻
今日からは私の城となるベッド
胎動へほらほら動いた妻の顔
虹を見た日より少女のこころ持つ
病葉のハリと胸にしるき音
かいしゃからかえつてせんたくおあさん
お年玉あげてもらつて子沢山
気が抜けた酒にも似たり代休日
出世するのに気の毒ないそがしき
サボテンや無冠の生を悲しまず
愛の鞭あてねばころげる独楽である
湯上りをコタツでちびりちびり春
節約のコツはいくさにふれて来る
一瞬のまどい自動扉開く
古きうた酔うて唄つて満ち足りる
くよくよとすまい勿体ない時間
無神論唱えて肌に成田山
本当のことしか言えぬ妻を褒め
近道を通れば枯葉が肩へ落ち
めでたさを加えて甥のエンゲージ
年賀状市会選挙を勘ぐりぬ 峰泉
どんぐり川柳会 谷垣史好報

なにかもさげて夜霧につまれる
菜々葉服だから全力出し切れる
SLの全力汽笛もうかすれ
贈りもの包みの中を見透かされ
ボーリングに出す全力は持つており
玄人が包むと角が生きてくる
綱帯のわけを一からまた話し
悔いのない看病全力尽きている
ベテランの余裕全力出さず勝ち
静水
房子
文晴
蘭幸
不朽
のぼら
鬼焼
かつ子
貞子
文明
英詩
西路
西合
扇水
季贊
こうじ
峰泉
雄峯
峯峯
岳人
生亭
痴生
好郎
薫風
吸江
弥生
真砂

折り鶴も出来た昔の葉包紙
全力を出すに出されぬ訳云えず
全力を後の試合に誓わされ
水引を掛けると綺麗な金に見え
風雪に全力で耐え大樹なり
入試目前係の全力あわれとも
はつたりを包むに風呂敷小さすぎ
全力をつくすと大臣口ばかり
全力の途中社長の気が変わり
折鶴も出来た昔の葉包紙
全力を出すに出されぬ訳云えず
全力を後の試合に誓わされ
水引を掛けると綺麗な金に見え
風雪に全力で耐え大樹なり
入試目前係の全力あわれとも
はつたりを包むに風呂敷小さすぎ
全力をつくすと大臣口ばかり
全力の途中社長の気が変わり

川柳大版

兄島与呂志報

最初から聞けばつまらぬ痴話喧嘩
末席の下戸へ最初の唄が来る
夕焼へ向つて希望の背伸びする
最初から酔わせて本心探る肚
煮詰っているのにテレビ今佳境
率賀帳最初にまわる床柱
悪夢から醒めて独房寒きびし
声たてて笑うと嫁からTELあり
額ほど土地に植木を雑居させ
細いのが達者か妻は貧に堪え
オールB平気でござる冬休み
冷え込みへ妻のやさしい燭の酒
初孫は一步一步と自信つけ
金策の最後の望み重い靴
満員車詰めれば詰まる尻を押し
良縁を鼻つ柱が邪魔をする
春浅し並んで歩く磯づたい
肩寄せて並んで歩く影二つ
嫁の里ふたりはふたりの席はあり
ネクタイの結び気になる成人式
元二

大坂形水報

勝算へ自信満々靴の音風影
満ちに英語も出来ず五十年 水泡
満ち足りた老後の幸せ夢に見る 稠雄
満腹をさすり箸置く雑煮餅 椰子郎
南大阪に柳会 金井文秋報

青空を知らぬ奇術の鳩で老い 一三三
七五三鳩にも晴着見てもらい 誓二二
餌を売る老婆へ鳩がねだりに来 綾女
本尊の御蔭鳩まで喰つていけ 喜風
会員となつて悪口もう言えず 美幸
禁酒会もう飲まれない金バッジ 好一
名誉会員顔のぞかせたこともなし 恒明
新風を吹かす会員よく目立ち 儀
老人会だけは無料で入れてくれ 静馬
雀追う案山子は米の値を知らず 俊夫
兄おぼえの服の案山子でどきつかせ 一舟
マネキンになりたい夢を案山子持ち 文秋
ふしだらを泣くだけ泣いて母の胸 滋雀
なげいても帰らぬ父へ泣きあかし あいき
赤ん坊の守りに泣きそな若いパパ 正彰
冗談が通じる父とうまが合い 智子
顔色が変わり冗談ひっこめる 好郎
糸みず目高は長さも余し 牧人
開発をみず地中でうるさがり 肖二
芸術院会員にして御曹子 多久志
川柳東大阪 竹中肖二報

新課長ちよつぱり照れた廻り椅子 三十四
ちよつぱりとふれた自慢で足がつき 摩太郎
酒ききのちよつぱり舐めた勘の沓え 喜風
ちよつぱりと舐めて盃洗わしてる 葵水
暮しむきちよつぱり覗くお茶を入れ 柳信

— 61 —

御先祖も三代たてばうやうやし 与士男
恭しく聞いた勅語よどこに居る 十郎
幼な顔して地藏心願受けとめる 千寿子
献灯もとかぬ所に石仏 マサ子
土偶人形並び旅情をなごませる 柳宏子

吉永川柳社(岡山県) 平井三与子報

運のいい人があとから来て座り 浄美
八卦見の運そのままに信じたし 宗義
おみくじの組まれた運へ気がめいり 大成
いたずらをされる所にいた不運 柳子
上向いた運へ夫婦のお茶の味 館坊
運よくばもしやと思う宝くじ 三与子
運勢をためす積りのくじを買い 榮
八月も二月と同じ風邪をひき 伊久野
八つ当りする子へ笑顔を取り囲み 草二
八百長の匂いへ白票入れてくる 胡風
八の字に結んだ口にある斗志 正州
演壇に松表彰の灯がまぶし 久米雄
木枯しに松の緑にある自信 秋月
盆栽の松に媚びてる梅の花 武夫
老松の枝に古城を入れて摂り 芳月
名匠が描けば松の木も真つ赤 輝生
門松もない正月を飲んで寝る 惠美子
白足袋が八の字をかく舞扇 清春
目じるしの松が枯れている故郷 清春
松風にガイドの声もよく通り 芳明
円満はハツ目鰻にある秘密 芳明

南海電鉄川柳会(大阪府) 辻圭水報

急いで居るのにエレベーター各階へとまり 季賛
エレベーター電気故障でまごつかせ 綾女
産み終えた喜び乗せたエレベーター 綾女

エレベーター窓の芽ばえも運ぶ春 宏子
エレベーターこん度は車椅子が来た 摩天郎
エレベーターいわと若さ歩きだし 圭水
乗てから向き変えられぬエレベーター 誓二
愛の2DKがエレベーターのない五階 誓二

城北朗句会

川口弘生報

十代へ明治おろおろするばかり 鉄児
振りむけば過去十年はまだ見える 生仏
十人並でよし人柄も財産も 弘生
体育の日歩け歩けの一万歩 濁水
紙人形十二単衣でかしこまる 志津
十九才この世を去って無垢の姉 つね
緑十字腕に街行く人多く 賀平
十代の娘姿も変わり行く 秀村
毒舌を吐いてお世辞で理合せ 繁子
ポルノ見てから煩惱が消えていた 葵水
こともなげに子は赴任する地球の裏 満津子
黒光り田舎で過せし孫の顔 晴子
初書門墨黒々と一ばかり そとえ
パパパと爺さんの炎かきたてる 三十四
魚屋も八百屋も水不足を嘆き 春果
川柳ささやま 河原みのる報
かねの価値解らん兒へもポチ袋 とんぼ
中身見て礼云い直すポチ袋 近江
金封の重さ読経の声となり 宗珠
ポチ袋貰えば其処に居てくれず 英断
ポチ袋無理やりねじ込む退院日 とも子
小気味よい形で新型エンコする みのる
新型の武器でアラブは容赦せず とおる
ビールも新型風邪も世も移り 与志
米袋この革命はみんなほめ 百合子

佳句地10選(前月号から)

川口弘生選

親として晴れがましい席素直なり 与呂志
馬耳東風寡婦一直線に行く 好郎
子を産めぬ人が笑った妊婦服 柳子
インフレに借します貢ぐ里の母 拝山
騙す氣の子の相談へのってやり 扇水
どっさりと喰うのに味の不足云い 文秋
宮仕えたまに常識はずしい 文秋
陽が照っているのになぜか淋しい日 幸子
残飯へ犬など飼うてみようかな 一榮
結局は残った者が払わされ 葵水

和歌山七面句会

中筋三幸報

ステレンスまた新型の風呂になり ひか平
新型も旧型もなく炭を焼く 緑村
新型もお点前だけは旧習い 素水
トップ氣にせぬ子の方に夢がもて れい子
初産へトップにとんでく里の母 よしの
政治家の昼間は狸夜はトラ 初音
福笹の虎とお多福むつまじく 竹堂
悪運を断ち切る除夜の鐘と聞く 可住
チョッピリは運を氣にして見る 八陣
もう他に注文ないかと言ううわ目 太茂津
女とは溢れる涙もつ運命 富子
何事もなかったようにホテル出る マサ子
注文を出せばきりない婿養子 勇次
モテルへあつちの処女を捨てに来る 凡夫
ホテル並みの病院にねて癌を病み 光治

募集

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

「父の日」 島田雄峰 選
「貿易」 大鶴喜由 選
「鮎」 国弘半休門 選

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 川村好郎 選
課題吟 (各題5句以内)

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

「宵宮」 和海草春 選
「独立」 若林草右 選
「盆」 川竹松風 選

川柳塔 (10句) 中島生々庵 選
水煙抄 (10句) 川村好郎 選
課題吟 (各題5句以内)

六月号発表 (4月15日締切)

七月号発表 (5月15日締切)

本社四月句会

日時 四月八日 (月) 午後六時
会場 以和貴荘 (いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

兼題

柳 戸田古方
「球」 竹中肖二 選
「高姿勢」 城一舟 選
「名目」 岩本雀踊子 選
「まぼろし」 菊沢小松園 選

席題 三題 当日発表
会費 二百円

各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区巖谷仲之町20

川柳塔社

5月の兼題 「分身」 「手腕」 「身」 「めし」

7月7日は句集刊行と川柳大会



大阪・神戸・京都・宝塚を
最も便利に結ぶ

阪急電車



定価 二百五十円 (送料十六円)
半年分 千五百五十円 (送料共)
一年分 三千円 (送料共)

昭和四十九年三月二十五日印刷
昭和四十九年四月一日発行

大阪市南区巖谷仲之町二〇番地
編集兼 中島蓬太郎
発行人 藤原童心社
印刷所 藤原童心社
郵便番号 542
発行所 川柳塔社
電話 大阪・二七一一三九八番
振替口座 大阪・三三三六八番

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ!

豚 焼 餃子
又 焼 饅 売

豚まんの王様、やき豚入り



大 阪・なんば



TEL 641 0551-2



<出張店> なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
京阪デパート/堂島地下センター/中之島サン・ストア/なんば新川店/奈良近鉄百貨店

姉妹品大和錦印



柔 道 衣
剣 道 具

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社
大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

昭和四十九年三月二十五日
昭和四十九年四月一日発行
第三種郵便物認可
創刊大正十三年通卷五六三号

美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の
静かな環境にある大和文華館
は 日本建築の特色に近代美
を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に
国宝・重要文化財を含む 有
数のコレクションです
観覧時間…10時～17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

近鉄



川柳塔

四月号



一番よい酒

うまい酒

清酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影

定価 二百五十円 (送料十六円)